
われはわたしや

おだなか しん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

われはわたしや

【Nコード】

N2735J

【作者名】

おだなか しん

【あらすじ】

遙か昔の話。我々の住む世界とは少し違った世界。我々の世界「彼方」と彼らの世界「此方」を結ぶ「きど」や「いわど」と呼ばれる通路があった。その通路と彼方の秘密を握り、故あって彼方へ逃れようとする者を相手に商売する者たちがいる。これは亜空間通路渡しを生業とする「わたしや」と逃走者「わたりびと」の物語。

壹：役者（前書き）

この物語は当初、小説家になろうSF競作企画『空想科学祭』（2008年9月～10月開催・第一回）に参加した『Dusk of Paradise』黄昏時に捕まえて』に続く2弾目の作品として構想されました。しかし、SFよりはファンタジー要素が強くいわゆる伝奇物にあたると作者は判断し、出筆を中断、期間中は別の作品を書き下ろし参加（レヴィアタンなど）しております。

この作品は、そんな『鬼っ子』となつてしまいましたが、科学祭の更新期間が間もなく終了しますので公開、書き下ろして行こうと考えました。拙いファンタジー・伝奇ですが、お楽しみ頂けましたら幸いです。（2008・10）

その後、5章までで長期更新を中断してしまい、お読み頂いた方々に申し訳ないこととなつてしまいました。この度、心機一転、世界観を大幅に改定、登場人物の言葉使いなどを修正し、再スタートとさせて頂きます。更新にはものすごく時間を掛けるつもりです。ご容赦ください。（2010・1）

壹：役者

「おおい」

「おお、来たか」

「おはようさん。今日は何人だ？」

「四人だ」

「多いな」

「ああ、多い」

「ガキはいるのか？」

「いない」

「ならいい」

燻された様に黒ずんだ蓑から、ぼたり、ぼたりと雨雫が零れる。

炭団たどんの様に真っ黒に日焼けした顔が深い皺を刻み、充血した細い目は射ぬく様に鋭い。その目が空を見やる。

漆黒の闇とは正にこのことだ。いま二人のいる『鶴めえの森』は昼でも暗い。この明け方まで一刻半さんじかんを数える頃合いでは相手の顔も見えない。しかも昨夜来、雨が降り続けている。

「止まねえな」

年下の相手がぼつりと呟く。

「ああ、止みそうにねえな」

年上の色黒が頷いた。

「こりや鹿滑シンスベリの坂、無理だな」

「難しいな。いざとなったら裏手へ廻るしかねえな」

「そうなりや最低ふたう二刻は余計にかかるなあ」

年下はちらつと暗い空を見遣ると、

「『かりびと』は？」

「まだ動いてねえ。今度の渡人は相手より2日ほど先行しているら

しい」

「誰ウケウチの話？この前ウケウチみたいなのはもう沢山だよ」

「岩館の婆だ」

「ならいい」

「早く発つしかねえだろう」

「あかりを用意するか？」

「そうだな。おめえのそこから強盗持ってこい」

「なら、おれが先行する」

「頼む」

「分かった」

打ち合せを済ますと、眼光鋭い男はするりと離れ、闇の中へと消える。

その片割れ、対照的に色白、夜目にも際立つので顔に泥を塗り付けた若者は女どもが色目を使う程の美少年、数え十七で仲間からは『役者』と呼ばれていた。

暗闇の雨の中、どうしたらそんなに早く滑らず静かに移動出来るのか、驚く様な早さで役者は沢までの獣道をひた走る。やがて流れ下る水音がすると走るのを止め、今度は沢伝いに時折、足が痺れる程冷たい沢の水に浸かりながら下流を目指し下って行った。

半時も下ると沢は小川となり、水音も穏やかに変わる。行く手に二本の目立つ松の木が現れると役者は川から外れ、自然に出来た堤を超えるとそこは畑になっていて、今は青菜が育っていた。

雨足は一時的に弱まり視界は開けて、足元が漸く見える程の明るさがある。役者は青菜の間を泥を跳ね上げながら走り抜け、その先の小屋の戸を微かに二回叩く。そのコツコツと言う音は雨音に紛れ、一間も離れば聞こえないものだったが直ぐに用心棒が外され、戸がカタリ、と寸尺開く。役者はさっと開け、辺りを伺って誰も見えないことを確認すると、音も無く忍び込み後ろ手に戸を閉めた。

薄暗い小屋の中は竈から覗く炎だけが明かりになっている。その僅かな光で見える小屋の内部は、タタキの先にたった一間の板の間があり、あまり使われる様子のない囲炉裏があり、その奥に微かに

見える壁にはこの小屋には場違いに見える桐の箆笥が一棹、浮かび上がって見えている。

役者はそんな小屋の様子を見遣ると笠の顎紐を解き、水滴を振り落とす。と、その白い頂に白い二本の腕がすつと伸び、役者はぐいっと引かれると、たちまち暖かい身体に包まれた。唇に湿ったものが押し当てられたかと思うと思いい切り吸われる。

「おいおい、止めねえか」

役者はしがみ付く女を突き放すと、

「悪いが遊んでる暇はねえんだ。直ぐに発つ」

「なんだあんた、今日は随分急ぐんだね」

「雨が上がらねえ。『渡人』^{わたらびと}を連れて行くんじゃあ、濡れた鹿滑の坂越えはしんどいからな。少しでも早く行くに超したことはねえんだ。おい、強盗^{がんどう}を用意しろ」

「あいよ」

女が三和土^{たたく}を奥に行き、壁に掛っていた強盗提灯^{ぼくち}と携帯用の火口箱を取って来ると、役者は、

「めし、出来てるか」

「待つてな」

女は竈の上の鍋から、雑穀で作った汁物を椀によそって差し出す。「渡人の握り飯はそこにあるから」

女が示す先に丸太を輪切りにしただけの台があり、その上に竹で編んだ小さな籠が二つ、風呂敷の上に置いてある。役者は汁物を掻っ込みながら頷き、笠を竈の前に立て掛け火に翳し、蓑も取らない姿のまま竈の火で冷えた身体を暖める。

女の作った汁物は、ただ単純に僅かな栄養補給が出来るだけの代物、世辞にも美味いとは呼べなかったが身体は暖まる。役者はあつと言つ間に食べ終わると、

「なら、行くよ」

「はいよ」

役者は女の作った弁当を風呂敷に包んで背負うと、女が強盗^{がんどう}と火

口箱と燧石の入った黒い熊皮の袋を差出し、役者は強盗提灯の中を覗いて獣脂蠟燭が立っているのを確かめる。

「もう三本、袋に入れてある」

役者は火口箱と油紙に包まれた幾つかの塊を確かめ熊皮に戻すと、

「なら行って来る」

「氣いつけてな」

「はいよ」

すると役者は、ふと女の顔を繁々と眺める。女は首を傾げ、

「どうした」

役者の手が彼女の顔に伸び、突然女は期待に胸が高鳴る。少しだけ慰めてくれる気になったのか？女が溜め息を吐いて右手を下に延ばそうとした刹那、役者は女の頬を擦り、

「お前、俺と同じ顔になつてら。さっきお前が顔をくっ付けるから」

女の顔に付いた泥を優しく拭った役者がそう言つと、女は何故か怒つて、

「早く行け、この甲斐性なし！」

突き飛ばされ、目の前でびしゃりと戸を閉められた役者は、

「ったく、なんだつてえんだ」

ぶつくさ言いながらも直ぐに表情は改まる。役者は畑を抜け川へ戻り、もう一度未だ暗闇に包まれた山の中へと消えて行った。

貳：ヤブ・渡人

「雨は止まなかった。」

目付きの鋭い男は笠を傾げ、明るくなり始めた空を見る。一面濃淡のない雲に覆われ、振り飛沫く雨は粒の大きな土砂振り、凄まじい音を立てて風景を霞に沈めている。風の無いのが幸いで、重い雨は頑固なまでに垂直に落ちて来る。今日は音を気にしなくてもいいだろう。これなら会話すら出来る。しかも、この振りでは『山守』^{ヤマモリ}たちも理由なくやつては来ないだろう。それでも来るとしたら相手は本気という事であり、やっかいな事になる訳だったが。

「さあ、行くか」

男は一人言つと杉の大木の下、打たれる雨を多少なりとも受け止める葉影に身を寄せ合う渡人たちに目をやる。

「この先、幾らかきつくなくなるが勘弁してくれ。出来るだけ近道するが足元が悪いから気を付けて、な」

「分かりました、宜しくお願いします」

今日の『渡人頭』^{とにんかしら}は、女人だ。瓜実顔の御目麗しい歳増^{としま}だが、芯があるのを男は見取った。この女なら皆を励まし弱音を吐かず付いてくるに違いない。

「なら、用意はいいな？」

男二人女二人の渡人^{わたりにびと}たちは、目付きの鋭い男を見て戸惑う様な素振りを見せるが、すぐに頭の女^{かしら}が率先し、

「大丈夫です、行きましょう」

男は頷くと歩き出したが、

「あ、あのー！」

頭に声を掛けられ、直ぐに立ち止まる。

「あなたのことは何とお呼びすれば？」

「ヤブ」

「は？」

「ヤ・ブ、だ」

「ヤブさんですね、私は、」

「名乗るな」

ヤブと名乗った男は押し止める様に手を出す。

「おれには言わないでいい。聞きたくない」

頭かしらが傷付いた様子で肩を落とすのを見た彼は続けて、

「悪く思うなよ。おれは聞かねえ方が助かるんだ。名前を呼ばなくてはならねえ時は、お前さんのことは『カシラ』と呼ぶからね。そちの兄さんは『イチタ』、そちらは『ニタ』、そこのお姉さんは『ヒメ』、だ。もういいか？行くぞ。急ぐからな」

最初の一時いちじかんは何事もなく、淡々と物事が進んで行つた。古い社の隠れ家を出て裏手に聳える山に入り、地元の間人しか知り得ない獣道に近い山道に行く。

ヤブは時折続くカシラを振り返り、一向がちゃんと付いて来ているか確かめた。その都度カシラは頷いて、笑みらしきものを浮かべ、大丈夫だと無言の合図を送る。

最後尾には若いニタが歩いていたが、その足取りは確かで細身の身体はヤブの見立て通りバネの様にしなやかだ。この様な険しい山道にも慣れている。色白だがお棚の若旦那や坊っちゃんでは無い様だ。逆に年上のイチタは顎が上がり始め、雨で判別つかないがびっしり汗もかいているはずだ。後々足出纏になるかも知れないが、今の所は遅れずに付いて来ている。ヒメはカシラとそんなに年は離れていない十八、九の娘だが、落ち着いて無難に歩いており、イチタよりは余裕がありそうだ。

そんなことをざっと目にするると、ヤブは何も言わずに、再び登り坂を彼としては精一杯ゆつくりと登って行く。

もう半刻過ぎるとやや平坦な場所に出た。明け染めの頃合いだだが、灰色の空は同じ灰色に沈む森を明らかにしただけで、渡人たちを暗闇に沈んだ時より陰鬱な気分きぶんに沈める。ただし足元が見えて来たの

は助かり、イチタやヒメが石や木の根に滑る回数も減って来た。

「ここで休む」

ヤブは山道が大きく右に曲って、岩が二つ三つ転がった空き地を示したが、

「地べたに座ってはいけない。この先歩きたくなるからな。辛いならそこいらの岩か木に寄つ掛かるんだな。そう、その要領だイチタさん」

イチタは岩の一つに背中を当て、大きく息を吐くと、腰の竹筒から水を飲み、

「あと、どの位かね、ヤブ」

「次に休むところまでかい？それとも『きど』までかな？」

ヤブの言い方に皮肉を感じ取ったのだろう、イチタは少々いきり立ち、

「次に休む所までだ」

「一刻つてとこだな。でもって仲間と合流する。さあ、はやく飲んじまいな。イチタさんが飲んだら行くから」

その一刻後。そこまで雨は激しく降っては収まり、再び激しく降っては収まりと一向に止む気配はなかった。渡人たちはむつつりと押し黙ったまま、これも無口なヤブに先導され、よろめく様に斜面を登って来た。

その時、ふとヤブは顔を上げ空気を嗅ぐような仕草をする。振り飛沫く雨に流れるひんやりとした空気を感ずるとカシラを振り返り、「止まれ」

彼女は疲れを滲ませながらも怪訝な表情で、

「どうしました？」

ヤブはそれには答えず、幾重にも巻いて肩から腰へ斜めに襷掛けした丈夫な縄を解き、その端をカシラに渡しながら、

「これを腰紐に通すんだ。一回廻して端っこは後ろのヒメに渡して」そして縄を次々に後ろの人間へ渡して行くと、一間ほど間隔を空けて全員が縄で結ばれた。ヤブは一人一人に、転んだり止まったり

する時は前の人間に声を掛け、前の人間は前の縄を引く様に伝え、自分もカシラの先に伸びた縄の先端を腰に廻して締めた。

するとそれを待っていたかの様に辺りが霧に包まれ出し、彼らが歩き出して二町も行かない内に、前を歩く人間も見え辛くなり、ヤブからはカシラしか見えなくなった。

「いいか、足元をしつかりと見て気を付けてな」

ヤブの声は籠ってカシラにはモゴモゴと聞こえた。

数珠つなぎとなった一行は、牛歩の速度で先を見通せない霧、既にそれを雲と呼んでも差し支えない高度になっていたが、その白い世界の中をひたすらに歩んで行った。白い世界が醸し出す閉所恐怖と孤立感は、嫌が上でも常に渡人たちに付きまとい、雨に打たれ長い登りで消耗した限界に近い体力気力を更に奪い取って行く。イチタは先程から震えが止まらなくなり、不安は心の臓を跳ね上げて喉がカラカラに乾き、仰ぐ2本目の竹筒も空となり遂には笠を伝う雨を手に受け止めて舐める様にしていたが、渴きは一向に治まらない。呼吸は不規則だったが、それが果てのない登りのためか不安のためなのかイチタにも分からなくなっていた。ヒメは青い顔を幾度も上下して、笠から崩れた髪が雫をしたたらせ、襟足から入る雨が着る物を重く冷たくしていたが、それも気にならなくなっていた。そんな陰鬱な一行が言葉も無く喘ぎながら尾根に達した時、

「止まるぞ、気を付ける」

ヤブがカシラに声を掛け、数歩前に行く歩みを止める。カシラはヒメに声を掛け、ヒメはイチタに、イチタは最後尾のニタへと声を掛け全員がヤブの所へ集まった。

「一時ほど遅れたが、この霧じゃ仕方ねえ。ここからもう一人加わる」

その声に応える様に先程よりは薄れ始めた霧、その中から黒い人影が現れ、彼らに近付いた。

参：懊惱（まよい）

「あれは役者、だ」

ヤブが紹介すると、麓の小屋から一気にここまでを先回りした役者は笠に手をやり、

「役者だ。どうぞ宜しく」

ヤブが渡人を順番に紹介し、お互い言葉少なに挨拶を済ますと、役者は、

「すぐそこに泉がある。足元に気を付けて水を汲んで」

渡人たちは未だ数珠つなぎのまま、縄を外したヤブから役者が先導に代わって、反対側の斜面にある大岩に挟まれた窪みに溜まった水溜りへ案内される。順番に竹筒へ水を汲む渡人を眺めていると、ヤブがこちらに合図しているのに気付く。小康状態になっている雨を見ると役者は、

「縄は外していいよ、そう、先頭のアなたから」

カシラから順に外した縄を器用に素早く巻き取った役者に、イチタが声を掛ける。

「もう登りはないよな？」

役者は短い呼吸を繰り返すイチタにふと顔を顰めたが、すぐに真顔に戻り、

「暫くは、ね」

役者は渡人たちを泉の横、廂ひさしの様に張り出した大岩の影へ誘いざなう。最低限雨風を凌げる岩影、間口は四間、大人が背を屈めて三間奥まで行ける広さ。中は意外と乾燥しており焚き火の跡も見える。過去どれだけの者がここで雨露を凌いだのだろうか。

「残念だけど火は点けられないよ。目立つことは出来ない。そうだろう？」

役者は真つ先に焚き火の跡を弄くり出したイチタにそう声を掛ける時、

「腹減つただろ、飯だよ」

ぶつきらばうに濡れた風呂敷包みをカシラに渡し、

「ここで食うんだ、ほら、座っていいから」

渡人たちは大人しく車座となり、やれやれと笠を外し、蓑を外して滴を払う。やがて渡人たちは思い思いに雑穀の握り飯を食べ始めたが、誰もがむっとり黙つたまま食べていた。そんな様子を見守つた役者は、

「待つていてくれ」

そう言うなり泉からヤブの待つ坂の上へ駆け上がった。待つていたヤブは渡人たちに話を聞かれぬ様に少し離れた木陰に寄ると、役者から手渡された握り飯を立つたまま頬張つた。

「随分手間喰つちまつたが」

ヤブが言つと役者は尾根の先、続く山道の先を見晴るかし、

「この様子じゃ、間に合わねえな」

「そうだ。迂回まわつたんじゃあ明けの刻には間に合わねえよ」

「行くのか、鹿滑シンスヘリ」

「アレじゃあ、無理だな」

ヤブは下の方を見やつて首を振る。

「では、やつぱり迂回まわるのかい」

「仕方ねえだろうな」

とは言つたものの、一行が歩き出した後もヤブは迷つていた。迂回か、鹿滑を行くか。雨は昼を回つてからは小雨となっている。しかし、彼らが行く尾根道は時折吹き抜ける様になつた風が驚くほどに冷たく、濡れた体から気力も体力も奪つて行つた。そんな渡人たちの様子では、とてもあの難所を無事に越えられるとは思えない。だが、刻限は迫つていた。

もちろん諦めて引き返す事は出来る。また、先に進んで二日待つ事も出来る。しかし、ヤブにはここで引き返しても二日待つても上手く行かないのでは、との思いが湧いて来ていた。それは根拠のある事ではない。親から仕込まれ、『わたしや』を始めて三十年、そ

の経験が教えている。このまま遅れればどちらも危険だと。

「何を考えてる？」

先に立った役者がいつの間にか並んで歩き、ヤブの顔色を窺っている。役者は若い数え五歳から『わたしや』をやっている。七歳ななつの時から供に付けたヤブは、今では役者抜きではこの仕事を考えられない程にまでなっていた。この三年程は役者もヤブと対等に渡り合うまでに成長し、今回の様に先導もこなすまでになっている。もうすっかり玄人の域に達した役者も、ヤブの不安を感じているのだ。「行くか、行かねえか迷ってるが」

「『かりびと』か？」

「奴らは馬鹿じゃねえ。追いつかない者は追わない。まあ、俺たちが鹿滑を迂回すれば『雲見の三太』なら追ってくるかも知れねえがな」

「じゃあ『山守』か？」

「……」

「なるほどな」

「聞かせてくれ、行けると思っつか？」

役者の目付きが鋭くなる。ヤブがここまで迷うのは大変に珍しい。この先、思い掛けないことがある前兆なのかもしれない。役者は素早くそう考えるが、しかし表情は破顔する。

「行けるだろ。誰が渡すんだい？え？天下一のわたしやさんよ」

ヤブは苦笑したが、まだ不安は解けない。彼は笠の紐を締め直すと、呟くように返した。

「おれが天下一だと？本当にそうならいいんだがな」

一行は先に起つ役者、最後尾にヤブ、間に渡人と布陣を変えて進む。

尾根は、靄は薄れたものの雨に濡れ滑り易く、気温はどんどんと下がっている。進む一行の荒い息は白い湯気となり、感覚を失いつつある手先足先は痺れて、最早自分のものとも思えない。それでも渡人らは俯いたまま、疲れを見せず着実に歩いて行く役者や、馬子

歌を低く口ずさむヤブに助けられ、うねうねと只管ひたすらに伸びる尾根道を稼いで行った。

「ほら、あれが鹿滑だ」
シンスペリ

役者がすぐ後ろを行くカシラに声を掛けた。カシラは疲労と間断ない雨で重くなった首を上げ、目の前の情景を見て息を呑む。それは町育ちの彼女の想像を超えた自然の驚異だった。

千丈の峰。千尋の谷。奇岩にしがみ付く様な松。数条の細い滝が雨に煙って幻の様に白い筋を見せている。尾根はここで断ち切られ、道は二つに別れている。

一つは急角度に逸れて斜面を下る。その先は谷底に流れる急流沿いに前に聳える山々を廻り込み、反対側へ向かう道。もう一つはそのまま斜面へ向かい、中途から岩場と化して道無き道へと姿を変え、そこに古びた青銅の鎖が岩に打ち付けられ止められて、ほとんど垂直に近い様に見える岩壁を遥か頂上まで続いている。

『祈りの森』へ向かう最初の難所、鹿滑シンスペリ。最大斜度七十度のガレ地と岩壁。この山脈の北斜面の一部を為し、壁とその手前のガレ地では何時も止むことのない強風、ここは風の通り道で今も夜来の雨が横殴りに吹き乱れている。ガレ地の岩は崩れ易い溶岩軽石。幾度となく雪崩の様に地滑りが起き、人も獣も区別なく巻き込む。幾多の命を奪って来た岩地獄、山の神の化身、カモシカさえも滑る事からこの名が付いている。

「ここを、行くのですか？」

恐怖の表情を浮かべるカシラにヤブは、

「さあ、どうするね？お前さん次第だ。行くか、廻るか」

カシラを見据えて二者択一を迫る。

「・・・廻って行っては、いけないのですか？」

すると役者が、

「廻れば三刻（六時間）は余計に掛るよ。そうすれば明日の刻限には間に合わねえ。明けまでに余裕を持って『きど』へ着くには、あれを超えなくてはならない」

カシラは眉間に苦悩の皺を浮かべながら、鹿滑を見やる。そして、イチタ、ヒメ、ニタの方を振り返り口を開きかけたが、三人に一樣浮かんだ諦めの表情に気付くと掛ける言葉を失った。

カシラたちは只でさえきつい山道をこの風雨の中、登って来た。靄のために自然歩みは鈍くなり、更に時を喰った。既に一刻ほど予定から遅れている。

鹿滑を迂回する道を行くと『きど』まで半日余計に掛ると役者は言った。この以上時を重ねれば『きど』が開く刻限までには間に合わない。そうなれば渡人たちは『きど』が再び開く二日間、高まる危険に晒されて過ごすしかなくなる。その間、追っ手が雇った『かりびと』に迫られ最悪討たれるやも知れない。逃げる者が『わたし』を雇う様に追う者にも『かりびと』という人狩り専門の狩人がいる。この『藍の森』一帯ではこれら森往きを生業とする者だけが分け入ることが出来る。ここは、その先にある『きど』の秘密と共に森に生きる者たちの世界なのだった。

カシラたちは追っ手に追われ町を離れ、伝手^{つて}を頼ってこんな遠くまで逃げ延びた。そして『わたし』の存在を知らされ、安住出来るという『彼方』を知った。知ったからには後戻り出来ない、と言われた。『渡る』のを止めれば秘密を守るため死んで貰う、と。それを四人、承諾して、だからもうカシラたちには先へ先へと前のめりになり這ってでも行く道しか残されていないのだ。

悩んだ末にカシラは消え入る声で言う。
「シシスベリを・・・行きます」と。

肆：鹿滑（シシスベリ）

『鹿滑』は、自然が時折見せる神聖の術で築いた城塞、立ち入る者を自らの『神将』を使つて拒み跳ね付ける。

最初に立ちはだかるのは風だった。真正面から吹き付ける風は笠を跳ね飛ばそうとし、蓑を剥ぎ取るうとした。次第に角度を増すガレ地の脆い岩に、手を掛け這い付く張り、か弱い四つ足の様にのろのろと登る。

二の将、雨も負けていない。一時は止みそうに思えた雨は、風に助けられ殴り付ける様に振り飛沫き、一粒、一粒が鋭く冷たい矢となつて彼らを襲う。既に感覚の失せた手にそれが当たると、掴む岩からもぎ取られ数尺ずり落ち、あわてて岩を掴み直す。顔を上げれば容赦なく打たれ、目を開ける事など考えられない。

そして風、雨に続くのは大地、斜面そのものだった。脆く崩れ易い軽石の斜面はそれだけで危険な罠、まして今は風雨に曝され尋常ではない。岩は掴む傍から碎け、彼らを支えるのを拒絶し、しがみつく者を無慈悲に谷底へ突き落とそうと仕向ける。

最後は水だ。既に雨となり彼らを痛み付けた水。それは脆い岩の間を走り、小さな滝の様になり、彼らの足を掬い腕を痺れさせもぎり取るうとする。

鹿滑は過酷な自然が容赦なく人を叩き、死の淵へと突き落とす地獄。そこは人が本来立ち入ってはならない神の領域なのだ。

一時も経つた頃、一行は開けたガレ地を越え漸く青銅の太い鎖だけが延々と伸びて行く絶壁に辿り付いた。

「・・・無理だ」

精も根も尽き果てたイチタが殆ど声にならない呻きを漏らす。

「登れるわけがない」

「登らなくてはならぬえ！」

ヤブは垂直に吹き下ろす風に負けないどら声で言い放つ。

「下がるか？もう遅いわ。下がる途中で谷底へ落ちるに決まってる。留まるか？天気はこのまま変わる気配もなし、ここにいたら落石に頭を碎かれるか芯まで凍えて動けなくなるか、どちらかだな。もう行くしかねんだよ。さあさ、こうしていても山は消えねえぞ。行く」

それでもどつしりと根が生えてしまったかの様に座り込む渡人たちを見て、ヤブは少し口調を穏やかに、

「なあ、こいつは正に行くも地獄、引くも地獄だなあ。なら先に行つた方がまだまし、ってもんじゃないのか。それによ、ほら、ヒメ、あんたがかわいい尻つぺた付けてるそこんとこの岩の裏、振り返って見てみな。」

疲労根敗し顔を上げるのも億劫なヒメが、のろのろと辛そうにその岩に囲まれた凹地を覗くと・・・

「ひい！」

声にならない声を上げてヒメはよろよろと立ち上がる。何だと言う様に立ち上がって覗いたニタも、その肩越しに見たカシラも、あつ、と声を上げ思わず二歩三步と後摺さる。最後に彼女たちの後ろから、恐々覗いたイチタの見たものは・・・

二間四方の空間、岩のカケラと共に白く敷き詰められていたのは様々な部位の人骨だった。されこうべが砕かれ、半分だけの眼窩が空を見上げたり、大腿骨が卒塔婆の様に並んで立っていたり、地獄の河原はさも有りなん、といった光景に誰もが衝撃で疲労を忘れた。吹き抜ける風の鳴き声が今更ながら不気味に響き、崖壁伝いに走り下る水が横殴る雨と相まって、この白骨の吹き溜まりを叩いている。ヒメは目眩に襲われた様に崩れ、あわてて差し出されたニタの腕の中で震える。口に両手を当てて息を荒げるカシラの後ろでは、イチタが妙に無表情で突つ立ち半分傾げた笠も直さない。

「さあさ、残って明日のお天道さんを迎えられなければ、ここで名無しの権兵衛、カラスや犬に食われて骨になる。それがいやなら、そこにある鎖を掴んで登るしかねえ。丈は四十ほど、始めてしまえ

ばすぐさ。おい、ニタさん、あんたが先に行くんだ。続いてカシラ、あんただ。大丈夫、役者が直ぐ後ろから行くからな。役者の後ろがイチタさんでその後ろがヒメさん。最後がおれって寸法だ。さあ、始めるぞ！」

ヤブはニタに近寄ると、風雨に揺れて岩肌を擦って嫌な音を立てている鎖を指差して、

「いいかい。ちっとしか説明しねえよ、よく聞いとくれ」

そして鎖の前にニタを連れて行くと呆けた様に見つめるヒメにも、ヤブが何を教えているのか分かる程大げさに、身振り手振りも豊かに登攀のコツを伝えるのだった。

もし晴れていれば、天道は西に傾き始める頃合い、しかし益々ひどくなる様に思える風雨は空を濃灰の下地に変え、その灰の上に走馬灯の様に走り来ては去って行く黒い千切れ雲を掃いて、神聖の地へ入り込んだ人間を威嚇する。振り飛沫く雨は上から下から、そして岸壁からも廻り込み、既にずぶ濡れの身体を叩き続け体温を奪い気合いを挫く。風も負けじと身体をきりきり舞いさせ凍えさせ、意識を失わせ様と企む。

先に行くニタは、ただひたすら太い鎖を手繰り両足を踏張って身体を引き上げ登って行く。その動きは下のガレ地から見やれば焦れつつたくなるほどゆっくりだ。

「・・・右手を・・・次に左手、五寸刻みに、尺を越えてはいけない・・・次は右足、探りながら崩さない様・・・確かめたら身体を引き付け、はいよと！・・・最後は左足、崩さぬ様に・・・次に右手を・・・」

ニタはぶつぶつ呟きながら登っている。直ぐ後に続くカシラも同じ言葉を念仏の様に唱えて登る。それはヤブが全員に一人ずつ口伝えに覚えさせた。

「今教えた呪文を呟きながら、その通りに登るんだ。自分が声を出している事を確かめながら。自分の声が出なくなったら止まれ。」

そこで息を整え、はいよ、と一声しっかり出して登り出せ。こいつは辛い、世の中、終わらねえ事などねえさ。上はやがて見えてくる……」

(終わらない事などない)

ニタもカシラも同じ事を考え、励みとして酷使の連続に悲鳴を上げる手足に鞭打って更に五寸、更に一步と進んで行った。

その様子をカシラの後ろから進む役者が見ていた。役者は軽快な足取りとしなる様な身体で難なく付いて来る。一見この不思議な順列、素人を先に行かせ玄人の役者やヤブが先頭に立たないのは、いざとなれば皆が助かる方法だからだ。

鎖は頑丈で時折、ヤブたち『わたしや』が手を入れて直し補強している。この鎖を手繰り登るしかないのだから順番は関係ない。ならば先の二人の転落に備え役者が行き、その後ろ、イチタとヒメには最後尾のヤブが付く。その方法が最善の策。渡人は全員襷掛けに丈夫な縄を掛けている。その襷の背中、バツの形の真ん中から、これも丈夫な縄が伸びて続く渡人の襷に繋がっている。更にその縄は下に行く役者やヤブが斜め掛けにして、万が一上の二人が転落した時に備える。鎖には一間毎に金輪が付いており、『わたしや』の二人はこの輪に腕を通し、上の二人の縄が張ったら次の金輪へと進んで行く。金輪は鎖毎に岸壁へ打ち込まれており、大人二人位なら暫らく体重を支える事が出来た。彼らは詠脈受け継がれて来たこの命綱を頼りに、この世の地獄を渡って来たのだ。

壁が最大斜度に近付くと、役者は一声、止まれ！と声を掛ける。

ニタが襷とは別に腰に巻き付けた帆布で出来た晒し状の布を近くの金輪に通し、教えられた結び方で結び付ける。ニタはそうして安全を確保してから下を振り向いた。

「暫く休もう。この先慎重に行かなくちゃならねえ」

カシラも教えられた通りに金輪へ結び付けたのを見て満足した役者は、

「なあに、もう半分は登っちまったよ。頑張ったなあ。ここまでは

上出来だ」

役者のよく通る声にニタは頬を緩めぺこりと頭を下げる。叩き付ける雨は止まつてみれば単調な滝飛沫の様で、慣れた今では滑る事だけ気を付ければいい程の存在となっている。カシラも下を見たが、自分が成し遂げて来た事に信じられぬ思いと高所恐怖に思わず目を閉じ、決して二度と振り返らなかつたと思う。

「ほら、しっかりと結べ、おつこちるぞ！」

ヤブの鋭い声が響き、見やれば直ぐ下、イチタが緩慢な仕草で布を金輪に結ぶところだった。笠に隠された顔は役者にはその半分も伺えないが、のろのろとした動作と反応の鈍さに限界が見て取れる。「ほーら、上を見てみな、あの鞍の窪みに着いたら後は尾根伝いの道だ。いいか道だぞ？階段でも崖でもねえ、真正銘の道だ。ほら、あと二十間、一時もしねえ内に着いちまうさ。そうしたら兄さんたちは、おれたちも辛い鹿滑を雨の日に登った、と自慢出来るようになる。もう直ぐだ」

ヤブの声は駄々子を宥める様に大らかに自信ありげに響く。だが、内心では焦燥と意地が葛藤を繰り広げていた。

完全に消耗仕切ったイチタ。ヒメも元来彼女が持っている芯の強さだけが最後の砦となつて、身体の限界を越えてここまで彼女を引っ張っている。それはカシラも同じはず、イチタと違うのはそれを表に現さない矜持があるからだ。極限の人間観察に長けたヤブには、それが手に取る様に見えた。はつきり言つてこのままでは全員無事に渡すのは覚束ないだろう。それが焦りに通じ、焦りは足を引くだけで失敗を招く早道だ、と言う事も充分に心得る彼の玄人意識に響いている。そうヤブが思つた瞬間。

「いいか！全員腹括れ！」

突然、役者が声を張つた。

「ここまで来れば登るか死ぬかだ。止まれば死ぬ。登るしかねえのなら、腹に力入れて死にモノ狂いで気張れ。気張れねえヤツは皆の足枷になるだけだ。そうなればそいつだけじゃあねえ、全員死ぬぞ。」

ダメだと思つたら襷を放て。あつと思つ間もなく極楽に真つ逆さまさ。大丈夫、後でおれが必ず骨を拾つてあの骨が捨ててあつた賽の河原に葬つてやるからな。さあ、どうだ。死ぬか生きるか、死にたいヤツはいるか？」

雷に撃たれた様に硬直する渡人。風と雨の音が吹き抜ける中、やがてカシラが、

「分かりました。さあ、行きましょう。こうしていても何にもなりません」

その声は疲労が滲み掠れてはいたが、はつきりと皆に届いた。最初にニタが、続いてヒメ、そして疲労に打ちひしがれたイチタまでがのろのろと晒しの布を金輪から解く。ちらりと振り返ったニタに役者が力強く頷くと、ニタは鎖を握り直し、重い脚を引き上げた。

伍：狗走（イヌバシリ）

手は赤く腫れあがり所々赤剥けている。草鞋は鼻緒が切れかかり伸びてしまい、イチタとカシラは実際切れてしまつて、巻き脚絆でかろうじてぶる下がっている様な状態、その足も泥に汚れた足袋に滲む赤いものが見えた。腕は重い二本の丸太の様で既に持ち上げる事も出来ず、掴む力も失せてしまい、だらりと両側に垂れ小刻みに震えている。それは脚も同じ、身体を支えるだけが精一杯、背負う荷は僅かなのにその重みで沈むかの如く、がくがくと揺れていた。

僅かに余力が残っていたヒメが消耗し切つたイチタを迂かして先に出る。彼女が崖淵を役者に助けられながら越えた後、漸くイチタが半分気を失い掛けながらも崖の淵から身を乗り出した役者と下から肩で突き上げるヤブの力で乗り越え、狭い鞍部へと倒れ込む。続けてヤブが疲れも見せず崖つ淵を乗り越えると、彼らの苦闘は一旦終わりを告げた。それを合図の様に渡人たちは崩れる様に座り込む。風雨は岸壁よりこの尾根の方が余程激しかったのだが、それも今一時は誰もが己の事に精一杯で気に掛ける者はいなかった。ヤブは渡人たちを暫らくそのままにさせた後、

「さあさ、尻を上げて。これでしまいじゃねえ。まだ先がある」
すると役者が続けて、

「みんな、よくやったやつたなあ。こんな雨ん中、おれたちも尻込みするこいつを登り切つた。さあ、これで難しいところはおしまいさあ。もう半日で着くからな。さあ、元氣出して行こう」

疲れを知らない『わたしや』の態度に、息も絶え絶えのカシラが言う。

「少し休む訳には行きませんか？この、ええ、イチタはこんな場所に来た事がありません。ヒメもです、このまま行ったら死んでしまいます」

するとヤブは、

「カシラ。誰も好き好んでこんなとこに来る訳じゃあねえよ。おれたちも粹狂でやってるんじゃない。これでおまんま喰ってるからな。おれはあんたから金四匁貰って、あんたたちをあちらへ渡すと約束した。渡す駄賃に安全は入ってねえ。それは初めに話してあるな？あんたたちはそれを承知でこんなとこまで来たんだよな」

カシラはうなだれ消え入る声で、

「それはそうですか・・・」

「こんなにひどいとは、ってか？そうさなあ、まち育ちのあんたたちは分かるまいよ、ここは山の神サンの領地だからな。下にいらっしやる殿サンはおれのモンだ、と思ってるんだろがね。だがな、たとえナンブの殿サンがそう考えようがこいら一帯は神サンのもんさ。おれたちは神サンの庭にのこのこ入って来た邪魔者だな。神サンは早く出て行けと怒ってるのさ。休んでなんかいらねえなあ。行く行かねえはあんたたちの自由さ。おれたちは行くよ、あんたたちと一緒に死にたくねえからな」

ヤブの長広舌にカシラは返す言葉もなく、ただ岩だらけの地面に這いつくばるだけ。イチタ、ヒメはヤブの話すら聞いていない。ただ意識を保つのに必死の有様。ニタだけが頭を上げ呆然とヤブを見やるだけだった。そんな打ち拉ひがれたがれた渡人に役者のよく通る声が掛かる。

「なあ、ここに一時もいたらあんたら全員生きて帰れねえ。下や崖も恐いが、ここはもつと恐い。なんでヤブが急ぐのか教えてやろうか？」

役者は思い入れたつぷりに間を置き、カシラの前にしゃがんで、カシラが顔を上げるのを待って、

「この先、尾根道は幾らか登るとずっと下りになる。足を滑らせて落ちたら確かに助からねえが、落ち着いて行けばなんて事はねえ。でもな、それでも人が落ちて死ぬ。鬼が出るからさ」

「オニ？」

カシラが信じられぬ様に言うつと役者は、

「もちろん角の生えた『なまはげ』みたいなのは出て来ねえよ。でも確かにオニはいる。狗いぬの形してな」

「イ又つて・・・」

「狼、ですか？」

戸惑うカシラに代わって聞いたのは二夕。役者は頷き立ち上がる
と声を張る。

「狗は鹿滑を越えて弱った獲物の匂いを嗅いでやって来る。一匹二匹じゃねえよ、群れて後から後からやって来る。見つかったら最後、追い掛けられてこの先の坂で捕まるか、そこから落ちるか二つに一つ、どちらも死ぬ事になる。なあ、カシラさん、どっちがいい？」

しかしその問い掛けを吟味する間もなく、ヤブがはつと顔を上げ冷たく刺さる横殴りの雨に打たれるのも構わず、辺りをきよるきよるかと探った。その動きには明らかに緊迫の色がありありと見え、疲労困敗したイチタですら見やる程。するとヤブは近くの大岩の上へひよいと身軽に駆け上がる。そして笠に手をやり辺りを睥睨へいげいし、何やら耳を傍立てていたが突然、ぱつと飛び降りるなり、

「来やがった！先振れの数匹だ、ここの気配を伺ってるぞ」

そして彼にしては驚くほど取り乱した様子を見せて、

「悪いがおれは行くよ、じゃあなあ！」

言いが早いかさっさと小走りに道を下り、あっという間に皆の視界から去った。役者は、

「さあ、おれもごめんだからな、あの血で真つ赤に染まった大きな口や何でも引き千切る牙で裂かれるのはな。あの涎を垂らした恐ろしく大きな灰色の身体を見たり、唸り声を聞いたが最後、もう逃げられねえから」

しかし役者の言葉を最後まで聞かないうちに、

ウォーン

至極間近で紛れもない狼の声がした。するとイチタがよろめきながらも立ち上がり、なんとか走り始める。更にヒメ、カシラと続き、何か一瞬戸惑った様子を見せた二夕も皆の後を追って走り出す。役

者は落ち着いて渡人が落とした振り分け荷を拾い、後を追った。

彼らが走ったのは岩が所々塞ぐように立つ急坂道。右に左に九十九折りに下り、岩は鹿滑でお馴染みとなった溶岩軽石。渡人たちは息も荒々しく、冷えた空気に盛大に白いものを吐き出しながらもめき、時折、躓きながらも坂を下り、やがて、十町余りも行った先、岩もめつきり少なくなり一直線に下る土の坂に変わるまで走り続けた。

本人も気付かぬまま全員を抜いて先頭を走り下っていたニタの前に、先走って逃げ去ったヤブが現れたのは、その岩場から土の覗く坂に変わったところ、大岩の陰から突如踊り出したヤブは、脇目も振らずに走るニタの前に飛び出し、驚いて、蹴躓くニタの身体を抱き抱える様にして止めた。

「よく頑張ったな、この岩陰なら安心だ、少し休みなさい」

そう言つて肩を叩くと、二番手に転げ落ちるようにしてよろよろと走つて来たイチタを抱き止めに再び道へ飛び出して行く。その後ろ、二人して支え合いながら脇目も振らず下つて来たカシラとヒメは、役者が追い付いて止めた。

渡人たちは、ヤブがその天辺に立つて今まで彼らが走り下つて来たガレ地の坂道を見やる大岩の陰で、仰向けとなつたり拝む形でひれ伏したりと、息も荒く意識も朦朧となりながら己の不幸を呪っていた。

いつの間にやら風は、音はするものの髪を靡かせ笠を押す程度にまで弱まり、心成しか雨も小降りになつた様に思える。役者はその大岩に背中を預け腕を組み、渡人たちが次第に落ち着きを取り戻して行くさまを観察していた。

ニタが起き上がりカシラも頭を上げるほどに回復すると、役者は岩から離れ、それぞれの元へ、彼らが落としていった振り分け荷やズタ袋をそつと置いた。カシラは役者が自分の膝元へ置いた荷に顔を赤らめ詫びた後、

「あの、大丈夫なのですか、あの・・・」

イ又は、と言おうとしたがまだ荒い息が言葉を殺す。役者は話さなくてもいい、と身振りで伝えると、

「イ又は下までは来ない。ここまですれば大丈夫だろう」

その綺麗な顔に笑みを浮かべ、

「さ、休んではかりもいらねえや。そろそろ行こうかね」

頷いて起き上がるカシラを後に、役者はヒメを助け起こす二夕に頷く。岩の縁に頭を預けてぼんやりとしているイチタの許へ行き、まるで子熊を背負うかの様に見えるイチタの背中の中、熊革の大袋から赤く塗った竹の小筒を取り出し、イチタの口に当てた。水をあてがわれたと思ったイチタが無意識にそれを飲み込むと・・・激しい勢いで咳き込み、思わず上半身を跳ね上げた。

「悪かったな」

さほど悪気もなさそうに役者は言う。

「熊の胆を酒に漬け込んだ気付けさ。目が醒めるだろ？」

「殺す気か？」

イチタは弱々しく首を振ると、

「なんて味だ・・・」

「なあ、狗の事も心配だけどね、イチタさん」

役者は何か複雑そうな表情を浮かべた。

「本当は何が一番怖いか知ってるかい？」

イチタは岩にぺたりと背を付け、阿弥陀になった笠も直さずその下から役者を睨むと、

「この上どんなひどい所へ連れて行く気だ？」

役者は肩を竦め、

「そんなことじゃねえ。それに別に好きでやってる訳じゃないし。

これはあんたたちが望んだことだからね。ま、それはそれとして教えてやるよ」

ぐいっと顔をイチタへ近付け揺るぎない眼差しをその顔に据えると、役者は高々と言い放つ。

「一番怖いもの。それは、あんだ、だ」

「なに！」

「恐いのは自分自身だ、と言ってる。人間てのはね、弱いもんさ、簡単に死んでしまう。獣は案外強い。こんなひでえ場所でもちゃんと生きて行けるからね。けれどもおれたち人間はこんな所、一日一晩だつてもちはしねえ。崖から落ちるか、頭に落石喰らうか、はたまた狗に喰われるか。死に方だけは色々ありやがる。そんな中で一番気を付けなきゃならんのは、腹に力が入らなくなることさ。腹んことこに力込めてねえと簡単にドジを踏む。周りに気を配らねえと、落ちてくる石の気配や追っ掛けてくる狗の気配や雷神さんのご機嫌とかを掴み損ねる。あんだたちは、そんな山の神サンのご機嫌は分からねえだろうから、おれたち『わたしや』が代わりに気を配るんだな。でもね、いくらおれたちががんばっても、あんたらが生きることを諦めたらもう助けることもできねえさ。あんたらは腹に力入れて、止めたくなる自分を押さえるだけでいい。それもなくなつたら、どうにもならねからな」

役者の声は穏やかに、朗らかにすら聞こえる。イチタばかりでなく、周りにへばつた渡人たちもその言葉を聞いていた。イチタはやがて、真っ直ぐ突き通す様な役者の視線に耐えられず目を逸らし、

「だから私が恐いと言つのかね」

「まあね」

イチタは岩に手を掛けよろけながらも立ち上がる。

「さあ、どこにでも連れて行け」

役者はにんまり笑うとイチタの背負い荷を直し、笠を直すと、

「腹に力入れて、な」

イチタは溜息混じりに、

「ああ。分かった」

「そんなやり取りを、細い目を更に細くして眺めていたヤブは、
「行くぞ」

岩から飛び降り土の坂の先、風に曝され奇妙に捻くれた松の林に

向かつて歩き始める。そのヤブが、笠を直しながら役者の方をちらりと見て軽く頷き、役者も笠に手をやって頷くのを二夕は見逃さなかった。

やがて渡人たちは、なんとか自分一人で立ち上がり、役者が荷を整え、この先の道行きに備えさせると、先に松林の縁まで下つて待っているヤブに向かつて歩き始めた。最後尾に立った役者が、後にする鹿滑の方を一度も振り返らなかつた事を確認した二夕は歩調を緩め、役者に並ぶ様にして歩く。

何か、と見やる役者に二夕は、

「役者さん。一つ聞いてもいいですか？」

「なんだい」

「狗は群れて襲つて来る、と言つていましたよね」

「ん？」

「見つかったが最期、そんな感じで」

「ああ、それが？」

「さつき狗が一声鳴いた」

役者の目が細められる。

「運がよかつたな。年寄りのはぐれ狗だつたんだろつなア」

「なるほど。私は少し南に行った所の拝領で、狩場を・・・」

「おい、身の上は話さないでくれ、わたしやは聞かねえのが掟だ」

「ああ、済みません。とにかく私は山を知っています。山もですが、あなたの言う狗も知っている。あやつらは賢い。見たところ、ここには獣の糧となるものが見当たらない。水場一つなさそうだ。だからあやつらめの餌となるものはここにはほとんどないことになる。

ここはあやつらの狩場としてはとっても難しい場所なんですよ。もつと下に行けばいくらでも楽に獲物が手に入るのに」

「弱つた二本足は楽な獲物ではねえか？」

「そうですね？あなたはお若いのに過酷な経験をなさっているから、そんな飢えで行き場を失つた狼しか知らないのかも知れないが、本来、狼は人間の匂いがしたら一目散に逃げるもの。獲物が大怪我

でもして血の匂いをさせていれば別ですが、狼は決して一匹では複数の人間は襲いませんよ」

「ふうん、そうかい」

するとニタは苦笑した。彼が初めて浮かべた笑みに、役者はまじまじとその細面を見る。役者も紛れなく美形だが、こうして改め見るとニタも優男振りでは負けてはいない。ただ、過酷な現在の状況がそんな浮かれた印象を打ち消しているのだ。今、思わず笑ったニタの表情が普段の彼を垣間見せる。直ぐに真顔になったニタは、前を向いて口を閉じた役者に尚も話し掛けた。

「勘違いしないで欲しいが、私はあなたたちを非難しているのではないですよ。感謝しているのです。あそこで『狗』が出なかつたら、もう誰も動けなくなつただろう。ありがとう」

役者は片手で制し、

「それ以上しゃべるな、カシラが訝いぶかしがってる」

なるほど、ヒメと肩を組み合つたカシラが立ち止まりこちらを見ている。するとニタは、

「なんでもない。さあ、行って」

カシラにそう言うつと役者に深く頭を垂れ、ニタは、早足でカシラの許へ急ぎ離れた。役者はニタが充分に離れると吐息を吐き、熊革の袋を背負い直すと誰にも聞こえない呟きを洩らした。

「狗ではなくて、親爺くまにするんだつたか」

陸：之森（ユキモリ）

それまでの苦難が嘘の様な道行きだった。地面に下枝を擦らんばかりの低く捻じ曲がった貧相な松がいくらか続いた後、緩やかに下る山道は次第に植栽の種類を増やしながら、針葉樹から広葉樹そしてまた針葉樹と森の装いを様々に変えて行く。

道は落ち葉が造った軟らかい敷物の様で、硬い岩場を越えて来た脚への贈り物になった。渡人たちは、役者が道行き拾い上げた程よい長さに真直ぐな太枝を杖に、軽快とも言える足取りで難なく道を稼ぐ。

ヤブと役者は一定の間隔で交互に先頭に立ち、時折後ろに続く渡人たちを振り返り、その顔色を伺って歩む速度を緩めたり早めたり立ち止まり小休止したりした。わたしやの二人は幾度かの小休止毎に先頭を替わり、渡人の並びをその都度入れ替えたりもした。

雨はほとんど気にならない程にまで治まり、風は梢を揺らす程度、あの狂暴さは微塵も感じられなくなっている。見通しの良くない森は、初めの内こそ行く者に樹々の多彩さで気を引きはしたものの、やがて杉の古木が林立する中をただ真直ぐに延びる道が緩やかに下って行く様になると、延々ひたすらに変化の乏しい姿を続け、道行く渡人たちをげんなりとさせる様になった。とは言うものの麓やしろの社を模した隠れ家を出て以来、緊張の連続と体力の消耗で、どん底の気分が続いた渡人たちのこと。普段ならこんな陰気な山道をこんな天気の日に行けば誰もが鬱ぎの蟲に捉われるところだが、今は辛苦から早くも解放されたかの様な気分で、ほとんど朗らかと言つてよい心持ちになっている。

ヤブは相変わらず周囲に目を配りながら後ろに続く者の息が上がる程度で早足で先導し、一時はお互いの肩に縋って歩いていた力シラとヒメも、今は杖を頼りに独りで歩いてきた。その後ろ、イチタはまだ足取りが時折乱れ、立ち止まっては後ろのニタや役者が追

い付くと歩き出すことを繰り返したが、鹿滑の時の蒼白な顔色に比べたのなら雲泥の差と言えた。

森は果てもなく続く様に思える。ここまでは、わたしやは行程について渡人たちには自ら積極的に言わないで来ていた。問われれば曖昧に答えはしたが、その訳もあの鹿滑を見れば分かるというもの、最初からあの難所を事細かに伝えていれば渡人の気分も滅入ってしまったことだろう。だからこの先のことは、渡人たちも敢えて聞くとはしなかった。聞くとすれば、後どの位で休むのか位で済ませていた。しかし鬱蒼とした森に入り一刻ほど、これだけ変化に乏しい平坦と呼んでも良い道が続けば、渡人ならずとも先が気になり出す。案の定真つ先に問い掛けたのはイチタだった。

「なあ、『きど』までは後どの位なんだ？」

イチタは最後尾を歩いていた役者が追いついて来ると尋ねた。しかし役者は苦笑いを浮かべると、

「気になるかい？」

「気になるよ」

役者は少し不機嫌に返すイチタに爽やかな笑みを返すと、

「確かにイチタさんがこの先不安なのは無理ねえさ。こつちも敢えて説明はしねえしな。まあ、先が見通せねえんじゃあ、次は一体何が出てくるかおっかなびっくりつてとこだな。けれどね、そんな余裕はあんたら渡人にはねえからな」

「何だつて？」

イチタは軽く往なされ、またぞろ短気の蟲が蠢く。役者はその顔を涼しげに見やり、

「よう、イチタさん。忘れちゃいけないな。あんたらはここでは難同然だ。護るものがいなければ一日も持つかどうか怪しいもんだしな。言ったよね？ここじゃ死に方は沢山あると。しかも選べねえ。まあどつちにしても死んじまつたら関係ねえけどさ」

役者はふと顔を歪め、不敵に笑うと、

「あんたには関係ないかも知れねえけどさ、おれたちはこれで飯喰

つてるんだな。あんたらを送つたらそれで仕舞いじあねえし、また、あんたらの様な人を送らねえといけねえからな」

「そんな大そうな事言つても、私たちが死んだら死人に口無し、だるうが。危なくなつたら放り出すに決まっている」

イチタも負けじとやり返す。

「そりや当然だ、イチタさんよ」

そう声を上げたのは、いつの間にか先頭から外れて並んだヤブ。

「おれたちだつて、たった金四匁で命まで差出しはしねえよ」

イチタは思わず拳を作つたが、どう見ても適うはずもないヤブにそれを振り上げる訳にもいかなかった。

「ひどいかね？」

そんな憤懣遣る方無いイチタを見てヤブが続ける。

「確かにひどいと思うよ、人の弱みに付け込んで言いたい放題だからな。でもね、こいつは人助けじゃあねえから。金儲けでもねえさ。あんたらは金四匁も取つて置いて金儲けでねえとは何事か、と言いたくなるだらうけど。金儲けする気ならもつと一杯ボツタくつてるよ」

「え？」

「四人で四匁。一人一人の命、たったの一匁。おれたちのまつとうな暮らし三年分。高いと思うかね？」

ヤブの物言いは皮肉に聞こえる声音だがその目は笑っていない。

それはさすがに察したイチタは口を閉じた。そんなイチタを見てヤブはひょいと肩を竦めると、

「命を賄うなら安いもんだろ。それにちいつと前までは二匁だった。あの頃はあちらへ消えたがる人が引つきりなしだったからな。近頃はこの辺りもめつきりおとなしいからね、安くしとかねえと、あんたらみたいに渡つてくれる人もいねえしな。まあ、そんな次第だからこつちはこつちの都合で動かせてもらう。ああ大丈夫、きつちり渡してやるから。あんたらは後なんぼの間おとなしく付いてくればいい。そうさな、あと一刻もすれば『祈りの森』に着く」

「なんだ、その祈りとやらは？」

イチタの問いにヤブは顔を綻ばせ、

「『きど』は時間になんねえと開かねえからな。しかも簡単に通られたらこっちのおまんま食い上げだしな。そんなことで隠してあるが、そんな秘密の場所でのんびり待つている訳にもいかねえだろ。だから時間になるまで待つ場所も必要なんでね。渡人が渡る時間まで行く末を案じ、戻れねえ事を惜しむ。祈りの森とはそんなところだ」

いつの間にやらカシラ、ヒメ、ニタも二人に近寄り、役者はその後ろに付いて寄り集まって歩いていたが、ヤブの話に自分たちの姿を重ね、しんみりとしてしまった。イチタですら拳を解き、俯いて黙る。ヤブはそんな彼らを優しげと言つても良い眼差しで見やり、今までの皮肉な口調が嘘の様に優しく締め括った。

「まあまあ、そんなに落ち込まねえで。『彼方』も『此方』と大して変わらねえんだし、そんな中、生まれ変わる様にやり直せるんだしな。全く持つて結構なことじゃあねえかね？」

暫らく誰もが沈黙し何の合図もなく指示も無かったが、つと先に動き出したヤブを追って全員が黙って歩き出す。わたしやの二人は無表情のまま淡々と行き、イチタは時折吐息が漏れ、カシラやヒメは面伏せて静々と進んだ。ニタだけがほとんど最後方に役者と並びながら前を向いて歩いて行った。

更に一時が過ぎた。相変わらず杉の森は続き、わたしやは半時も行くと小休止し、隊列を入れ替え、再び歩き出す事を繰り返した。これにはカシラは何か理由があるのだろうとは思ったが、余計な事であろうと聞きたいのを抑えた。しかし多少元氣を取り戻したイチタには遠慮がなく、五回目の小休止でヤブに声を掛ける。

「聞いてもいいか？」

「なんだね？イチタさん」

「どうして歩く並びを替えるんだね？」

するとヤブは、にやりとして、

「はて、そう言われればどうしてかな。深く考えた事はねえが、この辺を行き来する時には大抵入れ替える。昔からの仕来りだな」

「分からないでやっているのか？」

呆れてイチタは言うがヤブは涼しい顔。

「済みません」

イチタは杖に保たれて首を振り、カシラも誰にも分からぬ様吐息を付いたが、ニタは一人微かに頷いていた。

ニタは歩きながら暫くすると、絡繰り仕掛けが動いている様な、自分が自分でない様な単調な動作で歩いていて、気分はふわふわと夢見心地に陥っているのに気付いた。まるで転寝うたたねをしていて何かの拍子にはっと目覚める、そんな感覚に良く似ている。幾度も意識を混濁させ、石に躓いたり滑ったりしては自分を取り戻す、そんな事を繰り返していた。難所を越えた安心感と積もった緊張と疲労、それが原因なのは直ぐに分かる。役者は腹に力入れて、と言うが、それは油断するな、と言う事にも繋がる。実際、この単調な風景と雨風も凌げる森に入った事で、緊張を解かない方が無理と言うもの。ヤブたちは時折、渡人へ声を掛けたり歌ったり並びを変えたりすることで、この区間の『魔』、単調を少しでも紛らわそうと言うのだ。

だったら、とニタは思う。狗いぬの場合と同じで危険な何かを演出した方が手取り早いのではないだろうか？そこまで考えるとニタは、自分が狗の件を暴いたのは間違이었다、と反省する。わたしやは、危機的状況に慣れず体力も余り無い渡人を時に叱り時に宥め励まし、過酷な自然奥深くにあるという彼方への入り口、『きど』へと送るのが仕事。動かぬ馬には鞭が必要な様に、渡人にも何か刺激が必要な時がある。それが白骨の墓所であり、幻の狗であり、並び替えなのだ。

多分、とニタは思う。この一見穏やかな森にも何か怖ろしい話が用意されていたのだろう、それを私が止めさせてしまった。私が

狗の件を取り沙汰しなかつたら、熊なり何なりが出現したのだろう。すまないことをした、彼らの有様ありようが見えて来たと得意がり、余計な話で彼らの仕事の邪魔をした。これからは黙って付いて行こう・・・

「おい」
突然、袖を引かれ、思わず仰け反り反動で尻餅を付く。両手を後ろ手に地面に付き、はっと見やると役者が腕を組んで見下ろしていた。

「よく見て歩かねえと、な」

顎で指し示す先、この森の中、一体何処からか転げてこの場所に落ち着いたのか、見上げんばかりの溶岩の大岩が先を塞ぎ、道はそれを避けて急角度に曲がっていた。役者が止めなければ、ニタはまともに岩と激突していただろう。

「申し訳ない」

力なくニタはいう。

「なあに、そのためのおれたちさ」

齒を見せて笑う役者は、男のニタが見ても見惚れる様相、その笑みは女ならずとも大層魅力的に見え、何故かニタはその笑みに妖艶なものを感じ、思わず目を伏していた。そんなニタに手を貸して立たせると、

「けれど、氣い付けるに越した事はねえなあ。しっかり目を開けてよく見て歩かねえと、せつかく鹿滑を越えたと言うのに、こんなつまらんとところで怪我することになるよ」

そしてぼん、とニタの肩を叩くと先に歩き出した。

（今のは一体なんだろう？）

ニタは霧の中から突然、崖っ淵が覗いたかの様にどきり、としたそれは勿論、危うく怪我をするところだった事もあるが、今の触れ合いで役者に外側からは感じられない性的な何かを感じたからだった。

ニタはこの戦乱打ち続く世にあって、つい先日までは平穩で恵まれた生活を送っていたが、その彼には男色など入り込む隙などな

った。当然それが何かは知っており、彼が勤めた場所にもその趣向を示す者も複数いて、その整った顔立ち故か暗に誘いすらあったが毅然として受け付けないでいた。

今この非常時、疲れ切った自分にそんな感情が湧くなど、信じられない思いで一杯となった。彼は首を振ると、腰に下げていた雨にぐっしよりと濡れた手拭いで顔を擦り、顔を二度三度はんぱん、と両手で叩くと役者の後を追った。その直後。

「おい、役者！」

切迫したヤブの声が聞こえる。役者は素早く走り、ニタがぶつかりそうになった大岩に視界を遮られていたその先、ヤブやカシラたちが見やる光景を目の当たりにして歩みを緩める。

杉木立の先、突然開けた視界。そこにはただ赤土と石樽いしくれそして薙ぎ倒され切り刻まれて運ばれた杉の木の間があつた。

土砂崩れが道を塞いでいる。右手に聳える山の斜面がざっくりと割れ、そこにあつた植栽ごと大量の土砂が押し寄せ森を潰し、荒れ果てた空虚を創っていたのだ。

既に雨はこの半時ほどは完全に止み風も凪いでいる。冷えて行く一方の空気が再び靄を呼び、それは風景を紗の向こう側の様に、現実とは思えない墨画の様に見せていた。

ヤブは一行を振り返るや、

「待っている」

そう言うなり、まるで猿の様に土砂崩れで出来た赤土の壁をよじ登り、たちまち視界から消える。不安そうに眺めやる四人の渡人を他所に、役者は腕を組んで、その大量の土砂に断ち切られた道を透かし見るかの様に睨んでいた。

やがて、唐突に土砂の壁を崩しながらヤブが現れ、ずぶずぶの赤土に身体を汚しながら滑り降り、彼らの前に立つ。

「だめだった。この先へは行けねえ」

こんな状況だというのに、ヤブは信じられぬほど落ち着いてそう言うこと、

「ぐずぐずしてたらここも危ねえな。戻るぞ」

「戻るって？」

思わずイチタが身を乗り出すと、ヤブは、

「一里ほど道を戻るんだよイチタさん。道が二股に別れとったのを覚えてるか？そこにある目印の岩の前で休んだけどね」

「ああ、下に沢が見えていた」

「そうそう。で、反対側の道を沢沿いに行くと、この先の森の淵に辿り着く」

「廻り道か」

溜息交じりにイチタがぼやく。

「まあ、仕方がない。元気出して行こうや」

ヤブは土砂の上でにっこりと笑む。

しかしヤブはその時、鹿滑を前にした時以上の葛藤に捉われていた。それは役者も一緒に、土砂の山を下るヤブを見て微かに眉間の皺を増やした。

「さあ、戻るぞ」

表面上では変わらず、渡人の隊列を整えると、さあ、と来た道を辿り始めた。役者も、

「気持ちを切り替えて行こう、いくらか遠回りするだけだからね」
カシラにそう言うときり気なく先頭のヤブに並ぶ。

「腹括らねばならねえのは、おれたちになつたな」

役者は前を向いたまま、ほとんど聞き取れない囁きでヤブに言う。
「まあな」

ヤブはそう言った切り。暫く黙って歩いた後にちらりと後ろを確認し、渡人たちが一塊りで付いて来るのを確認した役者は、

「泊まるしかねえよな？」

「これも囁くと、意外な返事が。」

「いや、泊まらねえ」

「何で？」

「待ったら危ねえ」

「例の勘か？」

「そうだ」

役者はふと辺りを窺って、

「臭うのか？」

ヤブは吐息と共に頷く。

「ああ、あいつらの臭いがする。もう暮れに近い。やつら動き始めるぞ」

その時、再び雨が激しく振り出した。

「今夜はちいっと辛いかも知れねえな」

溜息交じりのヤブの呟きは雨音に掻き消えた。

漆・火縄衆（ひなわしゅう）

往く手は僅かばかりの時を経て闇に沈んだ。渡人たちは大人しく歩いてきたがその表情には不安の色が濃い。暮れるに従って雨は小降りとなったが代わりに霧が出始め、役者が点けた強盗提灯がんとうちょうてんも寸尺先に漂う白い霧を照らし出すだけだ。この先何があるのか、渡人たちには全く分からない。

やがて一行は起伏に富んだ細い山道に入り、その歩みは之森を順調に稼いだ時と比べ半分以下になった。先を行くヤブは、ここ暫くは何か自信を失ったかのように路傍をじっと見つめ俯いて歩いていたので尚更だった。

その目印は、知っている者さえも気を付けていなければ絶対に見落としてしまう代物だった。代わり映えのしない山道にある何の変哲もない路傍の石。その角に付けられた僅かな紅色。その石の先、同じような石の肩に蒼色。ヤブは振り返る役者に頷くと、その石と石の間から森に分け入る。

「ここに行くのか？」

イチタが役者に尋ねる。

「いいや。ここで待つ」

ヤブの姿は既に霧の中へ消えた。イチタは不安を滲ませて尚も問う。

「じゃあ、ヤブはどこへ行ったんだ？」

「助っ人呼びに行ったのさ」

役者はそれ以上何も言わず、

「さあ、ここで待つよ」

不満顔のイチタに肩を竦めて見せただけだった。

ヤブが分け入った森は直ぐに急斜面となった。霧のせいでその下は見通せない。その急で危なっかしい斜面に刻まれた、あるかない

かの獣道を滑り落ちぬように慎重に降りて行く。途中、丁度手掛かりに良い具合に何箇所か山葡萄の蔓が垂れているが、それを無視してひたすら後ろに体重を掛け、足を踏ん張り慌てず急がずに降りて行く。やがて勾配が緩やかになり、人がすれ違えるほどに開けた場所に辿り着いた。

山に慣れ、あの鹿滑や狗走の難所を駆け抜けたヤブが慎重になっていた訳がここで分かる。今降りて来た坂の先ヤブの目の前の草むらに、子供の腕ほどの竹槍が四本毎に組となり五組二列、丁度坂の角度に合う様斜めに並べられている。万が一坂を転げ落ちればその不幸な者はこの槍に串刺しとなる寸法だ。山葡萄の蔓は畏で、それを掴めば蔓はたちまち切れて掴んだ者を中空に離し竹槍の餌食とする。

こんな物騒な用心をした者たちがこの先に住んでいた。

ヤブは竹槍の前を慎重に横切ると、右手に折れた道へは行かず、左手の草むらへ入って行く。小糠雨が続く中、何をしてもずぶ濡れとなる草むらを十間ほど、目の前に檜の大木が現れた。ヤブは辺りを伺い、妙な気配のないことに得心が行くとその木の裏側へ廻り込んだ。その木の根元にはちいさな祠があり、木の精霊を祭っている。供え物を置く石の台は空だった。

「いるな」

合図を見やるなりヤブは一人言を言うとその祠の上、檜の太い枝から下がっていたカズラの蔓を引く。2度引くと休み、再び3度、2度と繰り返すと、待った。やがて・・・

「名乗れ！」

若い女の声だった。

「『わたし』のヤブだ」

「笠を取って前に出ろ」

ヤブは笠を取り雨に濡れるに任せ、前に三步進む。

「笠を被っていいぞ」

突然女が現れる。年の頃は十三、四。笠も蓑も身に付けず、頭か

ら黒い長合羽を羽織っていた。ヤブは挨拶抜きに語りかける。

「ジンはいるか？」

少女もぶつきらぼうに、

「頭は生憎出掛けている」

「なら、ジユウキチは？」

「いないね、一緒に出掛けている」

ヤブは内心舌を打ったが顔には表さず、

「なら、誰がいる」

女は初めてニヤリと笑むと、

「サブとシン、そしてオイラだけさ」

「ノスケモレイもホウタも、」

「みんな出払ってるって、ヤブの旦那。今夜は少々立て込んでいてね。之森を来たんだらう？なら理由は旦那にも分かるはずだ」

「邪魔したな」

ヤブは身を翻し、歩き始めた。

「おい、待ちなよ。案内を頼みに来たんだろ？」

少女はさつとヤブの前に立つと、

「え？わたしやさん。旦那がご機嫌伺いだけでオイラたちのところに来る訳がないしね。やってやるよ」

「その必要がなくなった」

ぼそりとヤブが言い、少女をかわして先に行く。

「おい、待てたら。せつかちな旦那だな、案内してやるって言ってるだらう？」

「餓鬼の案内はいらん」

「言ったね？それでも頭に筋がいいって言われてんだぜ？」

「半人前に地獄に連れて行かれたんじゃあ割に合わん」

少女は顔を真っ赤にすると、

「半人前？言ってくれるねえ、いつぞや、お宅の役者を助けたのはどこのどいつだったんでしょねえ？え？」

「あれは偶然だ」

「ぐっせん？」

単語に非難の全てを込めて少女が言い放つ。ヤブは思わず振り返り、

「声がでかい。そう言うところが半人前と言うんだ」

「ああ、すまねえ。分かったよ、お代はツケにしとくから、」

「元々ツケ払いだ。お次は負ける、か？地獄の沙汰も金次第だからな、満額払うさ、親方ジンの案内ならな。お前さんたちはダメだ」

「くそつたれ！今夜は出るぜ、山守ヤマモリどもが。どうするんだい？」

「知ってるよ。狗の気配がないものな、それに臭いがしやがる」

「だろ？なあ、足手まといにはならないよ、陰に付いて守ってやつから」

すると竹槍の前に出たヤブが歩みを止め振り返る。

「おいスミ。お前幾つになった」

真顔で眼光が鋭い。

「来月で十五になるよ。それがどうしたい？」

「おれはお前が赤ん坊の時から知っている。レイの背中に負ぶわれて。もちろん赤ん坊の時分から親兄弟の背中仕事で覚えるのはおれたちも一緒だがね。そんなお前がわざわざ地獄の案内をするつてえのを、みすみすさせとく訳にはいかねえな。今夜はお前の言う通り山守どもがやってくるよ、それもわんさとな。それは地獄さな。お前たちがおれのせいで死んだらお前の頭に恨まれちまう。そうなたらこの先、この『陣ノ森』を越える時には命乞いをしなくちゃならねえわな。『火縄衆』を敵に回したんじゃあ『わたしや』稼業もとんと立ち行かねえ。だからお前さんたちには頼まん」

ヤブは先程降りて来た獣道の脇に下がる蔓をぐいと引く。

「なら、畏を解いてくれ」

少女スミは暫く腕を組んでヤブを睨むようにしていたが、はあ、と大きく吐息を吐くと、竹槍の下、一見石臼のようなものの取っ手を掴んでぐいぐいと廻した。するとどこか上の斜面から雨の音に混ざって、ざざっ、ざざ、と草を滑る音がする。スミが黙って頷くと

ヤブは、

「じゃあ、すまなかつたな。寝てくれ」

そこでふと何かを思いついたように、

「頭や大人たちが戻って来たら、ヤブと役者が四人連れて森を行つた、と伝えてくれ。遅れても構わんから少しでも助太刀して貰えたら助かると、な」

「わかつたよ」

ヤブはニヤツと笑うと手を上げて、蔓を握り斜面を登って行つた。それを見送りながらスミは一人呟く。

「大人たちだつて？オイラも立派な大人だよ、わたしやの」

ヤブが霧の中から突然現れると、反対側の大木の下にいたイチタが身動きし、ヒメが驚いた声を上げる。

「なんだ、ヤブか」

しかしヤブは取り合わず鷹揚に手を上げると、

「待たせたな、行くぞ」

「助っ人とやらはどこだ？」

「一緒には行かない。連中は陰に行く。あんたらが見ることもないだろう、そういうもんだ」

それだけ言うとヤブは役者に目配せし、先頭に立った。イチタは何かぶつくさ言い、カシラが慰める様にさあ、と声を掛ける。小糠雨が間断なく降り続くなか、一行は重い足取りで出発した。

「誰だつた？」

スミが戸口に掛かる熊の毛皮を捲ると若い男の声が掛かった。まだ声変わりする前の少年の声だ。

「ワタシのヤブだつた」

「それで？」

もう一人、奥から声が。これは変声期に特有のがらがら声。

「案内してやるって言ったんだけどな」

「断られたのか？」

と甲高い声。

「ああ。オイラを餓鬼と抜かしやがった」

笑いながら甲高い声の主が奥の暗がりから現れる。歳の頃は十一、二。歳の割にはひよろりと背の高い少年だった。

「餓鬼じゃねえのか？」

「抜かせ。仕事はきちんとなしてらるだろうが」

「で、餓鬼は使えねえ、と奴は言ったのか？」

がらから声も炉辺の明かりの中に出て来る。こちらは十二、三の精悍な顔立ちの少年だった。肩から綿入れを羽織り、のそりと炉辺に腰を下ろす。スミは雨にすっかり濡れた長合羽を入り口の横にある掛け鍵に引つ掛けると熊の皮で出来たサンダル状の履物を脱いで炉辺に座る。

「オイラたちが死んだら頭が怒るってよ。死ぬもんかよ」

「で、行くのか、スミ」

これは甲高い声。

「行かねえのか？サブ」

スミは甲高い声の主に問う。

「やっぱりな。行くに決ってるよ」

甲高い声のサブは幼さの残る顔を膨らます。スミはもう一人に視線を移し、

「シンは？」

「お前らだけ行かす訳には行かねえだろうが」

ガラガラ声のシンは不敵に笑みを浮かべた。

ヤブたちは次第に急勾配になる山道が無口で進んだ。先頭に行くヤブに役者が後ろから近付く。

「それで？」

役者が後ろを行くカシラに聞かれぬ様、声を落として尋ねる。

「餓鬼どもしかいなかった。之森の山崩れのせいだ」

役者は微かに肩を落とすと、
「火縄衆にとつての聖域だからね。親方さんはみんな連れてつたるうな」

火縄衆はこの辺り一帯に住む山の民。狩猟を表の商売として生きている。之森は彼らの神聖な場所であると共に生活に欠かせない火縄銃に使う火薬を得るための硝石を産する。しかも下界の人々との接点でもあった。

「で、餓鬼どもは？」

「シン、スミ、サブの三人だけだ」

役者は苦笑する。

「やっぱり仲良し三人衆か。で、雇ったのかい？」

「いや。餓鬼の案内はいらんと断った」

役者の苦笑は続く。

「その様子だと出て来たのはスミだね？売り込んで断られた時のあいつの顔が浮かぶな」

ヤブは頷いただけで渋い顔を崩さない。

「で、付いて来るだろうね、あいつらのことだから」

「来るだろうな」

役者はニヤリと笑って、

「全くずるいな、え？わたしやさん。一旦断る。見栄を潰された餓鬼どもが頼まれもしないのに付いて来る。追っかけ親方連中も駆け付けない訳には行かなくなる・・・」

「仕事の内だ、仕事の」

ヤブの年期の入った顔。厳しさはそのままだったが口元が軽く歪んでいた。

捌：山守（ヤモリ）

霧と闇に閉ざされた山道を、不安と期待を胸に渡人が登って行く。歩き続けて既に七刻しちゆじかん、その間には鹿滑や狗走の難所がありひたすら続く山道を果てしなく歩き続ける森があった。この先にあるという『きど』の待合『祈りの森』まであと半刻一時。下がり続ける気温と思い出した様に振り続ける雨が無情に奪う体力を除けばなんとか無難にやって来た。ここまででは。

「とまれ」

先頭に立つヤブの声で一行は立ち止る。闇の中、明かりはそれぞれが手にする柿渋を塗り込んだ蛇腹の懐中提灯とヤブが手にした役者の強盗提灯がんとしちゆうちんだけ。その頼りない灯りに照らし出された渡人たちの姿は、雨を含んでずしりと重い蓑と笠で地獄の幽鬼の様に見える。「ここから先、灯りを消してもらおう。みんなおれの後ろに固まれ。鶴の森を行った時の様に縄を渡す。ほれ、カシラ、腰に結わえたらイチタへ廻すんだ」

「なぜ灯りを消す？」

当然のようにイチタ。

「灯り目指して『獣』がやってくる」

「また狗か？」

「そんなもんだ」

ヤブは曖昧に答えると、

「さあ、急ぐぞ」

一行は再び数珠繋ぎとなって歩き出した。先頭にヤブ、続いてカシラ、イチタ、ヒメ、ニタ、最後尾は役者。暫くすると暗闇に目が慣れだし鬱蒼と茂る森の木々と雨が降ったり止んだりを繰り返す空の区別が出来るようになる。霧は何時の間にか消え、気温はどんどん下がって行き、雨も曇交じりになっていた。

「おい、聞いていいか」

闇の中、ヤブに後ろから声が掛かる。

「いいが、声を落としてくれないかね、イチタさん。獣が聞き付ける」

「すまん、その、灯りはまずいと言ったな？」

「ああ」

「あんたは持っている」

「これか？」

ヤブは手にした強盗提灯を少し上向け、

「こいつも無ければさすがにおれたちも目しいだな。それにこれは困いがあつて傍からは見えぬ」

「余計なことを言った、すまない」

「いいつてことよ。ただ、この先は少し黙ってくれ」

「わかった」

ヤブは闇の中顔を顰める。強盗を持つのはそんな理由ではなかったからだつた。

やがて一行は暫く続いた急坂を越え、両側の森の木々が途切れ、昼ならば遠くの尾根をも見晴らせるだろう眺めの良い場所に着いた。心成しか闇も薄れ、闇にも慣れた目に空と草木の区別が出来る。霧は暫く止んでいて、風もそよとも吹かない。イチタは歯の根が合わぬほど震えていたが、それでも文句を言わないのは疲労のせいか短い間の体験のなせる業だろうか。

「とまれ」

ヤブは後ろに続くカシラに声を掛ける。その声は低く小さく呟くよう。カシラも後ろのイチタへ、イチタはヒメへと伝言し、数珠繋ぎに慣れた隊列は乱れることなくピタリと止まる。ヤブは仁王立ちで腕を組むと、木が疎らに生えただけの開けた高原を眺める。

「正念場、だね」

「ああ」

いつの間にもやら横に来て囁いた役者にぶつきら棒に忍えると、

「カシラ」

「はい？」

「縄を解く。後ろに伝えて」

役者が皆を回って縄を回収する。

「どうしたんだ？」

闇の中イチタの問いに役者は、

「この先、一里ほど開けたところを横切るんだ。だから用心しないとね」

「何に用心するんだ？」

しかし役者はもう、後ろのヒメやニタのところへ行ってしまう。

微かに震えながら見上げるヒメの視線や真剣な眼差しのニタに、大丈夫、がんばれと声を掛けながら縄を受け取ると、

「さあ、皆、ヤブのところへ」

役者が四人をヤブのところへ連れて行く。そこに暫く止んでいた風が一吹き、ヤブは顔を顰めたが闇の中のこと、それをイチタたちが見ることは出来ない。

「いいか、良く聞け。この先、『獣』がいる野っばらを行かなくてはならねえ。ここからは固まって行く。問われるまでは一言も口を利いてはならねえ。何が起きてても、いいか、おれたちから離れるなよ」

ヤブの声は落ち着いていたが、闇のため顔色を伺えない分、微かな緊張も滲み出ていた。それは渡人の不安な気持ちにゆっくりと沈んで行き、イチタやヒメの震えは寒さばかりでない不安の表れとなる。

「さあさ、これを過ぎれば本当に『祈りの森』の入り口だ。もう少しの辛抱だ」

役者はそう励ますが、ここが最大の正念場だということを勘の鋭いニタは感じ取り、思わず懐に忍ばせた得物に手を伸ばしていた。

黒い雑草の影。その先、やや薄く墨色に沈む空。ただひとつヤブ

の手にする強盜提灯がんとつちようちんの灯りを頼りに一行は深と静まつた草原に行く。どのくらい先へ進んだものか。暗闇で狩場を行った経験もある二タですら距離感がなくなつた頃。二タはふと左右の枯れた草の間に何かの気配を感じた。それは獣が忍び足で獲物に迫るあの殺気に似ていたが、そこに生きた気配を感じられないのが不気味だつた。二タは我知らずブルツと震える身体を強いて押さえると、すぐ右を行く役者を伺う。役者はせわしなく辺りを伺っている様子で、この妙な気配も気付いているに違いない。

襲撃は突然始まつた。左右遮るもののない台地の上、左手から背の高い枯れた雑草を掻き分け、ガサツと降つて湧いた黒い影。その数はほんの瞬きする間にあれよあれよと増え続け、雪崩を打つように殺到する。群れからはグオーという鳴声。その身も凍る叫び。野獣が獲物に襲い掛かる時の吼声に他ならない。するとヤブが一声、「皆固まれ！」

そして役者に、
「頼む！」

両手で下手投げに強盜提灯を投げる。役者はそれを受け取るや提灯の後ろを捻り仕掛けを引き出す。それは握りと一体化してまるで大きな引き金のように見えた。役者は提灯を向かつて来る黒い群れに向けるとその引き金を引き絞つた。強盜提灯の筒先から火炎が迸り、二間ほど炎の弧を描く。役者がそれを左右に、まるで水を撒くように振ると、雨に濡れた枯れ草が燻されたような煙を上げ燃え始めた。

その強盜は『火龍』という。紅花から絞つた油に粘着性の強いネダと呼ばれる木の樹液を混ぜたものを、水鉄砲の要領で押し出し火を付ける火炎放射器だつた。ネダの樹液ヤニはこうして濡れた草木にも絡んで火を付けることが出来る。

役者は焰が自分たちを中心に弧を描き、暫くは獣を防ぐ火炎の堤防となつたことを見るや左手で強盜を保持し、右手を背中の熊皮の袋にやって中から黄色に塗つた竹筒を取り出す。その筒を強盜の後

部に付いた突起に突き刺すようにする。ゴボゴボと音がして中の液体が強盗に飲まれたのを確認すると強盗を置き、今度は熊皮から二尺くらいの黒い竿を出す。それを前に一振り、後ろに一振りすると二尺だった竿はたちまち六尺はある短槍に変身した。折り畳みの槍を手慣れた手付きで固定するとそれを一閃、空を試しに切ってみる。驚く二夕に爽やかな笑みを見せると槍を小脇に強盗を持ち直し、役者の戦闘準備が整った。

「あれは……」

呆然と聞く二夕を余所に、役者は火炎の前で右往左往する群れを睨み、

「あいつらは人喰いだ。人のように見えるが道理は通じない人妖にんようさ。いいか、すっかり固まっているよ。ほら、カシラとヒメを後ろに。護身の得物くらいあるだろう？ 安心してないで二人をしつかり守れ、いいな」

落ち着いた役者の物言いに二夕も頷き、懐から白絹の袋を取り出すと口を開く。中からは立派な柄の懐刀が現れた。それを満足げに見た役者は、消え掛けた炎の壁へ今一度火炎を注いで補強した。

「な、なんなんだ、あれは」

その左手では恐怖も顕わにイチタが聞く。あれとしか言いようのない黒い生き物。火炎に照らし出され、ちらりと視野を掠めたその姿。両の腕には熊や猪のような剛毛、その先曲がった手の甲にも剛毛が。その爪は黒く鋭く醜い。何よりも紅く光ったその目。その有様がイチタの脳裏に刻まれ再現され、恐怖いやがわつが否応にも湧き上がる。

「山守だ」

「ヤモリ？」

「今はそんなことはいい！ 生き残ることだけ考えている」

「どつやつて」

「うるさい、だまれ！ それを今やっているところだ」

ヤブはそう言い捨てるや、遂に焰の壁を迂回して、右手から降って湧いたように飛びかかってきた一体に見事な回し蹴りをくれる。

ギエつと不気味なほどに人に似たうめきを残してそれが消え去ると、今度は左から躍りかかった一体に裏拳をくれて怯ませるや脇に蹴りを入れ打ちのめす。しかし山守は後から後から押し寄せて、いつかな減らない数を頼みに襲い掛かった。ヤブは懐から匕首を抜きざま右左と切り付けて連続四、五体の山守を薙ぎ払う。役者は、と見やれば強盗提灯の仕掛け・火籠で押し寄せる山守を焼き、それでもすり抜ける人妖を得意の短槍で打ち据えている。

ニタは懐刀を前に突き出し、後ろにカシラとヒメを庇いながらじりじりと下がる。その静かな佇まいは、山守こそ知らなかったものの普段の生活で野獣を知っていた彼だからこそ出来た態度。さすが人妖の群れも無闇に突っ込むことはせず、低く唸り声を上げ、荒く臭い息で澄んだ空気を汚しながら間合いを詰めようとしていた。人妖が走り回りながら立てる枯れ草のガサガサという音。後ろで震え戦く二人のことを意識から締め出し、ニタは無心で人妖に対する。その時。

ターン。

鋭く高い音が響いた途端、ニタへ正に飛び掛らんとした一体の山守が弾かれたように倒れた。続けてもう一度、ターンという音。今度はイチタを庇ったヤブに飛び掛った一体が倒れた。ヤブは闇の中心一人笑う。役者は一体に槍を突き通し、足で飛ばし引き抜きながら呟いた。

「ようやく来たか、スミ」

山守とヤブたちの死闘が続く草原の先、周辺よりは少しだけ高い瘤のような小丘、その天辺^{てっぺん}。枯れたススキの一叢、その陰に三人の少年少女がいた。

ターン。乾いて高い銃声が響き渡り白い硝煙が上がった。

「ちっ、外した。次」

少女が後ろに声を掛け、まだ銃口から硝煙が棚引いた、すらりと長く形の良い銃を手渡す。

「あいよ」

受け取った甲高い声の少年が換わりに同様の銃を渡す。少女は受け取るや片膝を立てたその格好のまま銃を前に向け、その銃床を右肩に当てる。

その銃は領主や鉄砲衆が持っている火縄銃とは形も性能も格段に違う。最大の違いは火縄が無く銃身が恐ろしく長いこと。それは我々の世界、近世ヨーロッパではマセット銃と呼ばれていた先込め銃に良く似ていた。もう一人の少年が発射された銃を受け取り、換わりに先込めの弾が装填された銃を甲高い声の少年に渡す。そうして慣れた手つきで空の銃を立て、火薬匙で適量の火薬を掬い、それを弾込め棹で押し込み、続けて明らかに火縄銃の弾とは異なる先端が尖った弾を入れ、押さえの和紙を棹で突き固める。その直ぐ前で再びターンと銃声が上がった。

三人の手際の良い連携で七を数える間隔に一回、正確に銃が発射されていた。それまでに発射された弾丸は十二。斃した人妖は七。狙撃を続ける少女は冷えて湿度の高い空気に白い息を吐き、すうつと吸い込む。一旦息を止め、ゆっくりと吐きながら慣れ親しんだ引き金を絞る。ターン。正にイチタに飛び掛らんとした二町先の人妖がふいに顎を上げ、グエツと一声、もんどりうって仰向けに倒れた。「やつつ。次」

少女の声に甲高い声の少年、サブは片手で差出された銃を受け取りながら、折ったススキの枝を地面に置く。ススキの枝で『正』の字、その横『丁』字がひとつ。そこに横棒を加えたサブは、後ろで装弾するシンから新たな銃を受け取ると遠眼鏡を取り出し、辺りをさっと一通り眺めた。

「スミ、少し左、回りこんだ」

「あいよ」

銃を構えた少女、スミは銃身をすつと左に流し新たな標的を認めると、再び引き金を軽く絞った。

玖：親方・甚

比較的平坦な祈りの森へと続く山地、之森^{ゆきもり}。その南に隣接する起伏の大きな山の連なりを陣ノ森^{しんのもり}という。その先は沼沢の広がる不気味な『藍沼^{あおぬま}』と、その更に南は一面又スキヤカヤの生い茂る台地『朱ヶ原^{あけがはら}』となっていて、原野はそのまま『祈りの森』の南端に接していた。

之森から祈りの森へ至る山道は、周辺の険しい山地を行く道筋よりは余程進み易かった。それ故祈りの森へ向かう者は普通、遠回りとなる陣ノ森へ下ることはない。しかし、之森から祈りの森へと抜ける者の目的はただ一つしかありえず、目的が一つであるからこそこの道行きは先に行った者を追うことを簡単にしている。そのため、追う者があり、その者たちに迫られたり止むを得ない事情があつたりした場合、追われる者は陣の森へと下り、一旦藍沼か朱ヶ原へ抜け、祈りの森へ向かうという迂回路を取る。これはただの迂回ではなく追う者を諦めさせる効果も狙っていた。藍沼も朱ヶ原も単なる沼地や草原ではなく、荒野や山地に慣れた『かりびと』さえも躊躇させる化物の棲家だったからだ。ならば追う者、かりびとは先に之森を抜け、祈りの森で待てば良い、と思えるが、これはかりびとには許されない禁忌だった。

追う者、『かりびと』。渡人^{わたらひびと}に『わたしや』が付くように、渡人を捉えたい、又は亡き者にしたい者にはかりびとが付く。だが、かりびとは祈りの森やその周囲には入れないという。彼らが渡人を狩るのはそこまでの道程に限られている。どうしてそうなったのか、今では土地の古老ですら知らない。だがそれは、この数百年に渡って築かれた何人たりとも破ることの出来ない掟だった。

では渡人とわたしやが藍沼や朱ヶ原へ廻れば安全か、といえはそうではない。そこには前述のように化物がいる。その一つが『山守^{ヤマモリ}』と呼ばれる人妖^{にんよう}だった。わたしやは厳しい環境や飢えた野獣の中を

行くのが商売なので、強い。しかし人妖は、人の理ことわりの外にある化物。如何いづかなわたしやといえども、その山守が群れて掛ければ厄介だった。そこでわたしやは山守を避けられないと悟った場合、この辺り一帯で狩を糧に暮らす者たちに頼る。その者たちを『火縄衆』と呼ぶ。その火縄衆、かりびとは仲が宜しくない。その名の通り、火縄衆もかりびとも本をただせば同じ狩人。何時の頃か対立し、敵対する間柄となっていたからだ。

こうして何百年もの間の経緯で、わたしやと渡人わたりびと、かりびとや火縄衆の関係が出来上がっている。

深夜。森の中を音もなく影が走る。小ささまざまな影は冷えた空気に白い息を吐き、獣の早足の速度で坂を登り懸崖けんがいを下った。

やがて影は、その森の奥に佇む静まり返った館の正面へ辿り着く。影の一つが立ち止り、残りは辺りに散った。残った影は音を立てずに戸口に寄るとじっと何かを見つめた。やがて影が手を挙げると、辺りに散っていた影がさつと集まる。

「小僧つこども、誰かに案内を頼まれたかね」

ひょうきんな声は今し方戸口に佇んだ影。

「あん馬鹿たれどもが。腕試しとばかり逸つたな」

野太い声の主は、戸口の際に下がった不在の印、ブナの小枝を弄りながら唸る。

「おい、放太ホフタ。書置きがあるか見て来い」

「へい」

ひょうきんな声の主、放太が戸を引き開け、室内へと消える。待つこと暫し、放太は手に白木の小片を持って出て来ると、

「残していたぜ、頭」

渡された男は木炭で書かれた文面に目を通すや、

「重吉シユウキチ」

呼ばれた男は三十路に手が届くかという年齢、髪を長く伸ばして後ろに束ね、顎鬚が硬い輪郭の顔を強調する。左目を黒い眼帯が覆

い、残された右目が闇の中でもきらりと光っていた。板を渡されざつと目を通すと、野太い声の男を問わず語りを見る。それに応えて男は、

「乃助ノスケを連れて先に行け」

「承知」

片目の男は何処へ、とも、どうするとも尋ねない。いつの間にか現れて直ぐ後ろに控えていた闇に聳える身の丈七尺の大男を見やり、「乃助。お前は火筒を持って行け。おれには『神弓しんきゆう』を二挺」その巨人は無言で頷くと、ほとんど身体を二つ折りにして館に入る。その後姿に放太が、

「乃助、二挺しか残ってないからな」

巨人はちらりと放太を見返すと了解の印に手を上げ、中へ消えた。「澄スミのやつ、『神弓』を三挺も持って行きやがった。頭、『龍笛りゅうてき』を使つていいか？」

放太は野太い声の男の前で腕を組む。頭と呼ばれた野太い声の男は唸ると、

「許す。持つて行け。但し十発だけだ。後は火龍で我慢しろ」

「いいよ。馬は？」

「使わない。面倒が増えるだけだ」

「じゃあ得物の他に油や火薬は背負えるだけ持つていかないと・・・龍笛や火筒も使うとなると、人手を借りるかな？」

そこで頭の顔を見やると、頭は頷いて同意する。放太は、

「怜レイ！」

「あいよ」

今まで黙っていた、外体がたいの良い女が前に出る。

「『村』に行つて長おさのところから人足一人、火薬と火龍油を三十斤ずつ頼んで来な。そいつを急いで『朱ヶ原あけがはら』まで頼む、夜分遅くに申し訳ない、とな」

「分かった」

「怜」

行きかけた怜は頭の声に立ち止る。

「長に甚^{ジン}からだと言つて『翔落』を借りて来い。助太刀は要らない、おれが使うから、とな。借りたら朱ヶ原へ持つて来るんだぞ」

「シヨウラクだつて？」

放太が声を上げ、怜が眉を顰める。

「頭、『天守^{ソラモリ}』の心配か？来るのか？やつらが」

頭の甚^{ジン}は闇の中、フンと鼻を鳴らすと恰幅の良い身体を揺する。

「お前も見ただろ？御森^{おんもり}の山崩れ、あれは神サンのお怒りだ。それにこの臭い」

甚は木々の間から真つ暗な空を見上げる。

「もうじき雲が切れる。久々にわんさか湧いて出るぞ、山守も天守もな」

甚はそこで腕を振ると唸るように、

「さあさあぐずぐずするな、とつとと掛かれ！」

さつとそれぞれの方向に散る火縄衆。館から大きな身体が大筒やら火薬の小樽やら神弓やらを抱えて出て来た。入れ替わりに放太が館に入り、重吉はその巨人・乃助から銃一挺を受け取る。いつの間にか怜は消えていた。そんな手下の様子を仁王立ちで見やりながら甚は呟く。

「一体どんな厄介者を連れて来たんだ、わたしや」

夜半が過ぎた。深と静まった荒野には異臭が漂っている。咽返りそんな血の臭いと死臭。相も変わらぬ闇の中、それはその場に潜む者に絶えず吐き気を覚えさせ、恐怖心を煽った。人妖の襲撃は渡人にとって、いつまでも続く地獄の光景に映ったが、実際は一時^{いつとき}の四分^{ぶん}の程度の長さでしかなかった。今、その人妖は彼らの周囲に散らばりこちらを窺っている。その気配は濃厚で、疲労と恐怖に打ちのめされてしまったイチタにすら感じられるほど。

「こんなことなら来るんじゃない」

そのイチタのぼやきは感情に乏しくうわ言に近い。

「気をしっかり持って、イチタさんよ」

役者がゆつくりと近付きイチタの肩に手を掛ける。

「来てしまったものはしょうがないなあ。それに、そのまま残っていても追手に討たれたんだらう？ならまだ生きていることに感謝しないかね」

「こんな非常時だというのに相変わらず役者は余裕を感じさせる物言いだった。放心状態だったイチタも微かに感情を動かされ、

「なんでそんなに脳天気でいられるんだ、お前は」

役者を睨むイチタの目は死んだように力がなかったが、どちらにせよ今は見えない。

「こんな事に慣れているからか？」

「そりゃ仕事柄何度も怖い目に遭ってるって。でも、こんな事に慣れなんかないよ、おれだって怖い。怖いのは怖いが、ね、イチタの旦那、ぼやこうが後悔しようがこの状況は変わらないよ。なら少しでも気持ちを楽しにしてゆったり構えた方がいいに決まってる。そうじゃないかな？」

「いい心持ちだ、羨ましいな。正直こんなに怖い思いは初めてなんだ」

イチタは抑えた吐息を吐くと暗闇を見晴るかし山守と呼ばれる人妖の気配を探った。そこかしこで唸るような、ざわめくような音がしている。その殺気立った気配に、ぶるっ、と身を震わせ再び吐息を吐いて面伏せるイチタだった。

「大丈夫だよ、イチタさん」

闇の中からさらりとした声が掛かる。

「こんなことは初めてじゃない。そのためにおれたちが付いているんだからね。何度でも言うけれど、自分が折れちゃおしまいだよ。自分が折れなければおれたちが助けられる。必ず『きど』を拝ませるよ」

役者の声は殺気に囲まれながらも朗らかなほど。その声に励まされ助けられここまで来た。イチタは絶望の淵でその声に縋る。

「頼む」

搾り出すように言った。

「どうだ、大丈夫か？」

ヤブの声に寄り固まった三人が顔を上げる。闇の中、辛うじて輪郭の影として頼もしい姿が見えた。

「ええ、なんとか」

カシラは声を潜めて言う。その声は疲れ果てて震え掠れていたが、闇の中微かに光るその目はしっかりとヤブを見据えていた。その後ろ、ヒメは面伏せたまま傍らのニタに抱えられていたが怪我はない様子、ニタは頬を山守の鋭い爪に掠られ、血の筋が一つ二つ見えたがこれも大した事には見えない。

「どうやら無事だな」

穏やかなヤブの声にニタは、

「このまま山守と睨み合いでは・・・」

その後の事をとてカシラやヒメの前では言えない。言い淀んだニタにヤブは小声で、

「夜明けまでこのままならおれたちの勝ちだな、ニタさんよ。あいつらはお天道サンに弱いんだ、だから絶対明けの刻までに襲って来る。さつきは随分と痛め付けてやった。助っ人もいる。来るなら来い、と言ったところだあな」

ヤブは聞き耳を立てているカシラやヒメにも安心させるように、のんびりと自信たっぷりに言い放つ。ニタはその裏にあるものを正確に読み取って、

「ええ、ヤブさん。あなたたちは本当に強い。城下の剣術指南でもあんな戦い方は出来ないでしょうね」

「いやいや、そんなお偉い方相手じゃ敵わないなあ、ニタさんよ。」

おれたちのは無手勝流だ。おさむらい相手では役に立たんよ」

「それに助っ人の方々。何か知らないけれど、火縄であんな遠方から撃ち掛けるなんて。一体どんな手を使っているのやら」

「あんまり詮索しないで下さいな、ニタさんよ。あれらのことは秘密なんだ。下の殿サンたちが知ったら大変だ、山狩りが始まっちゃう」

「絶対に口外しませんから安心して、ヤブさん。それにわたしたちはあなたたちに連れられてきどへ行くから。告げ口しようにも明日には彼方ですからね」

「そうだったな。さあ、もう少しの辛抱だ、みんな固まって絶対に離れちゃいけないですぜ、ニタさん」

ヤブの声にほんの少し演技の綻びがあつた。緊張からか声が上がつたのだ。カシラが身動きして頭を下げる。ニタは心臓の鼓動を抑えるために深く息を吸って吐くと、落ち着いた物言いで、

「頼んだよ、ヤブさん」
「任せな」

僅かに薄い闇の夜空を背景にした頼もしい影が離れる。ニタもその影に頭を垂れ、瞑目した。

そこから三町ほど離れた小丘。先ほど山守を撃つた瘤のような丘から離れ、若い火縄衆の三人はカヤの茂みに潜んでいた。今頃あの丘の上には猛り狂った山守がスキの穂を散らして歩き回っているだろう。山守相手では同じ場所に長らく居座るのは危険だ。

「で、もうそれだけかい？」

驚いた澄スミが囁く。その声音で緊張が伺えた。

「ああ。間違いねえ。もう三十二発しか残ってねえや」

答えたのは進シン。その声も強張っていた。

「一挺辺り五十、合わせて百五十は持って来たんじゃないのか？」

「ああ、そうだよ、それだけ使ったってことさ」

責める口調の澄に進も自然投げやりになる。もういいと首を振った澄は、もう一人の少年に目を移し、

「三。何発か持って来てないのか？」

「生憎だな。オイラは鉛玉しか持ってねえ。コイツのな」

三人の中で一番年下の三が懐から護身用に持って来た小筒を取り出す。燧石式の、後の時代には拳銃と称される代物だが、豆粒大の円形弾を発射するもので、二間も離れたら当たるかどうか半々といったところの命中率、接近戦で相手の腹に押し付けんばかりにして使うのが普通だ。もちろん、その弾丸は澄が使う『神弓』の弾丸とは較べるべくもない。

神弓は特別な銃だ。長さは四尺余りと、普通の火縄銃より長く、銃床を肩に当てるように出来ている。これも火縄にはない特徴で、その火縄を必要としない燧石式、しかも銃身には旋条が切つてある。発射されたドングリ型の弾丸は回転しながら直進して命中率は火縄の比ではない。その弾丸も鉄砲鍛冶が玉鋼を先細りに整形した特別製だった。火縄の鉛玉がほんの数十間先ではどこへ飛んで行くか分からないのに比べ、神弓の弾丸は三町先の的も射抜く。もちろん経験を積んだ射手の場合だったが。

「どうする？ 次の襲撃じゃ飯を掻つ込む間より早く使い切るぜ」

進が澄に問い掛ける。思ったより早く弾丸を消費した責任の一旦は、装薬や弾丸の管理が担当の進にもある。想像以上に多くの山守を前に興奮し、澄に注意して撃つ間隔を少し空けさせることを怠ってしまった。

「どうもこうも、やるしかないだろ？」

いらつく澄は吐き捨てるように言う。

「一旦引くか？」

と、これは三。

「引く？ こんだけの山守の中をどうやって？」

本当は泣き出したいくらいの澄だった。経験を積んだ火縄衆、そう、兄貴分の放太や、神弓を持たせたら文字通り神掛かりの重吉なら絶対にする筈のない失態。事の大きさがじんわりと沁みるように迫り、澄は頂垂れた。

この暗闇の中、濃厚な殺意が漂っている。山守を知る者はそれを

人妖の臭いだと言う。子供の頃よりこの危険な気配を覚えさせられた澄たちは今、その恐ろしい臭いが益々強くなって行くことに焦り始めていた。夜明けまでに必ずもう一度襲撃がある。その時、僅か三十発程度でどうなるのか？守ってやると豪語したわたしやや渡人を守るどころか、自分たちの命を守るのさえ覚束なくなってしまうのだ。

その時、辺りがぼんやりと明るくなり、カヤの中で蹲る三人の姿が浮かび上がる。さっと夜空を見上げる澄の視界に、薄雲を通して朧に半円を見せる月が中天に見えた。雨も止み霧も晴れ、天気が回復しようとしている。

「まずいな。こいつはまずいよ」

言わずもがなの三の声がますます絶望の淵に澄を追いやって行った。

拾：死闘

薄衣が一枚ずつ剥がれるように雲が飛散して行く。月明かりは半月と雖も直近での闇を思えば天地の違い、今や渡人たちの吐く白い息や大地と枯れ草との境まで見通せるようになった。中天の月は白々と冷たく朱ヶ原を照らし、そこに潜むもの、徘徊するものを浮き彫りにする。明かりが差したことでこの風景は見るものに不気味で凄惨な有様をありのままに知らしめることになった。その彼処に揺れる黒い影。蠢く影は時折月明かりを受け、その剛毛や爪、眼をきらり光らせた。

「またもや何の合図もなかった。ふらり黒い浮き彫りの一角が揺れ、たちまち崩れ、グオーと咆哮を上げるや固まって潜む者たちへ迫った。」

「いいか、絶対に離れるな！」

ヤブは背後に一声、白刃を月光に煌めかせるや最初に躍り掛かった一匹へ一閃、月光に黒い血飛沫が光り、掛かる粘液がその顔を汚す。返す刃でもう一匹を払い、更に廻り込んだ一匹に強烈な廻し蹴りを喰らわせる。頭を抱えて縮み込んだイチタの耳に、人妖の叫びが、ヤブの息遣いが届く。人妖の恐ろしく甲高い声にきつく目を閉じ、ヤブの次第に乱れる息音に耳を覆う。そうすることで全てが夢の彼方の出来事と変じるかのように。

それはヒメヤカシラも同じ、頼もしい役者や風体からは想像外の粘り強さを見せるニタに庇われ、身を寄せ合い互いに手を取り、この世のものとも思えぬ凄惨な光景から目を逸らす。役者は火龍を構えざま弧を描くように一射、まずは焰の壁を作ると、ゆるり槍を構える。その姿をちらり見遣ったニタも小刀を前に左右を見渡す。すると左側、焰の壁が途切れた辺りに踊り上がる影。役者がそこに火焰を向けるとたちまち数体の山守に火が点き燃え上がった。のたう

つ人妖の上げる断末魔の叫び。それを覆さんばかりの吼声が上がり、踊る焔の脇を素早く駆け抜け抜けた人妖が飛び掛って来る。迷うことなく役者の槍が突き出され先端がその人妖に当たったかと思えるや役者は槍を横へ振る。切っ先に裂かれた山守の首は僅かに掠めたばかりに見えた槍で落とされ転げた。その残された身体から迸り出る血潮を避け、飛び上がった役者はその後ろに続く山守の胸倉目掛け槍を繰り出す。目にも止まらぬ、流れるような槍の舞に思わずニタの目が留まる。と、役者は振り返りもせず的一声、

「気を逸らすな！」

はっと我に返るニタの前に山守の爪が現れるや、横殴りに振りかかる。鋭く黒光りする爪が、仰け反って避けたニタの眼前を過ぎり空を切った。すると横合いから再び爪。

(しまった)

突然ニタの時がゆっくりと流れ出す。伸びる爪が左肩に食い込み、養を千切る。その同じ爪は彼の肩を掠め旅衣と襦袢と共に肩の肉を裂く。鋭い痛みにはニタは呻き意識が霞む。しかし同時に小刀を逆手に人妖の内懐目掛け突き出した。

グエツ！ヒキガエルの声に似ていなくもない嫌な一声と共に、その山守は横に広い口からどす黒い血を吹き出す。その血に濡れるのも構わず、ニタは刀をぐいつと捻るや横様に引き抜いた。どう、と斃れる山守に気を散らす間もなく横様から再び爪。これに得物を縦ぶきに一閃、瞬時に爪は消え人妖の悲鳴が響いた。

山守とヤブたちの死闘を前に澄スミたちには為す術がない。撃とうにも弾は僅か、この状況下無闇に放つ訳にはいかない。どうすると問サツい続ける三の頭を拳固で叩いて黙らせた進シン。無言で眼下の闘いを睨んでいたが押し寄せる人妖に奮戦するヤブたちの姿がはつきりと思渡せる視界に別の動きを捉えるや、はっと緊張し声を上げた。

「来やがった！」

ヤブたちを取り囲み渦を巻くように押し寄せる一団の山守、その

外側で参加する機会を窺っているような集団、それがゆるり二手に割れる。割れた片方、少ない方は中心で受け止めるヤブたちに向かい既に硬く締まったような渦の外に加わり厚みを増す。残りは何かに操られるかのごとくふらりふらりと渦から離れ次第に・・・

「おい、澄！」

緊迫しながら声に焦りも滲ませ進が問う。

「分かってるって！」

吐き捨てる澄の心は暗い。深い吐息と共に左手に握り締めていた『神弓』を構え、焦る進や三には自信がないようにおどおどとして見える動作で、緩やかに登る坂へ差し掛かった先頭の人妖に照星を合わせる。すーっと息を吸い、ゆっくりと吐き出す、その瞬間、引き金を引く。

パーン。

再び響く銃声が彼女たちの戦いの烽火シロシだった。

「次！」

放った神弓を三に放り出すように渡し、装填された二挺目を受け取る。三挺目と交換に一挺目を受け取った進は逸る心を鎮めようと慎重に弾込めの棹を取る。

「あと三十」

二匹目の山守が斃れた直後、三が声を上げる。先程は斃した人妖を数えたススキの枝が今度は残りの弾を数えるために引かれて行く。「よく狙えよ」

三は澄にそう言うと、ともすれば震えそうになる身体に強いて動くなと念じ、次第に大きくなる人妖の立てる枯れ草を分ける音を意識の外へ追いやった。

「絶対に当てるよ」

「うるさい！」

パーン。狙った山守に変化はなく、未だ先頭でこちらに向かう。

「ちっ！黙ってる、気が散じる！」

外した腹いせに三を小突くと銃を取り替える澄。構える動作も何

時になくもどかしく、狙う先の山守は月明かりの下だというのには
やけて見える。知らずに腕が震え、狙いが定まらない。定まらない
からなお焦る。

「ちつくしょう」

呟く悪態も力がない。

パーン。今度は当たったが急所を外れ、標的の人妖はもんどり打
って倒れたもののすぐに跳ね起き、後から押し寄せ抜かして行った
同属に続く。

「に、二十八」

澄にはその甲高く震える三の声が忌々しい。落ち着けと心に命じ
るものの腕の震えはいっかな納まらず、心の臓の鼓動は痛みを伴う
ほどに激しい。本当に自分も泣き喚きたいのだ。絶体絶命の正念場
このような時、頼もしい兄貴たちはどうするのだろうか……

ふと、澄の頭に重吉が語った言葉が浮かぶ。それは澄が神弓を初
めて手にした時のこと。

「銃砲は手足のように馴染ませないといけない。そうしないと頼み
の時にそっぽを向いちまう。もしもそいつがそっぽを向いたら、そ
の時はご機嫌を伺う」

「鉄砲に？」

まだ数え十一の澄に火縄衆切つての神弓の使い手はにやりと笑ん
で、

「鉄砲は生きているんだ。だからこつちに腕があれば従うし腕がな
けりゃ従わない。落ち着いていれば静かだが落ち着きをなくせば暴
れる。当たるもんも当たらねえ。そういうもんだ」

「ふうん」

そうして重吉は半信半疑の澄へ、動揺した時に銃を自分の手足に
戻す呪いを教えたものだ。

「諸神よ、護神よ、私の揺らぎを押さえ給え。猛るものよ、之神よ、
私の小心を奮わせ給え……澄、言ってごらん」

(もろかみよ、まもりかみよ、われのゆらぎをおさえたまえ。たけるものよ、ゆきがみよ、われのしょうしんをふるわせたまえ)

じわじわと寄せる人妖の群れを前に、いつしか澄は神弓を置いて目を閉じていた。何事かを繰り返し唱え、大きく深呼吸、ふーっと息を吐き整える。

「おい！澄！」

三がその袖を引くが澄は目を閉じたまま。山守の群れは既に小丘の半分ほど、一町を切つて間の数で間合いを計る距離になっている。「澄！やつらが来るつて！早く撃て！」

三の甲高い声は最早悲鳴に近い。すると地団駄を踏む三の肩を抑えた進が、

「騒ぐな。澄を煩わすんじゃねえ」

不思議と落ち着いた態度で装填した神弓を押し付けるように渡す。「放太のアニキがいつも言ってるだろ？じたばたしたつて万事なるようにしかならねえ。腹が据わつてねえと之神サンが助けてくれねえ、つてな」

正に土壇場。澄の姿を見て腹を括つた進はポンと弟分の肩を叩くと、

「任せようぜ、澄に」

するとすくつと澄が立ち上がる。今まで着ていた合羽をはらり落とすと手にした神弓を構える。その動作は緩慢なほどゆっくりだったが、進に肩を組まれた三は言い出したくなる自分をぐつと堪えた。澄の立ち姿は全く普段の彼女に戻っていて、構えた神弓がぴたり下に向けられ、微動だにしない。進は三の肩を離すと片膝を折つて澄の一步後ろに控え、装填された神弓を右手に立てて、じつと迫り来る山守の群れを眼で追っている。そんな二人を見て三も次第に目の前の霞が晴れたような気分になつて来た。

兄弟分が見事に自分を抑えているのだ、負けていられない。自分も「里」から選ばれて甚の下へ送られた一人なのだから。

里の子は数え二つで男女の例外なく甚の元に預けられ、五つになるまで甚たち「陣守」^{じんもり}によって育てられた。「甚」という名は代々陣守の頭を意味し襲名されて来た名前だった。陣守の館の裏手にはそうした子供たちが暮らす「守子の里」^{もりこ}があり、今は十二人が里から通う女たちによって養われていた。子供たちはそこで暮らしつつ陣守から火縄衆としての生き方を学ぶ。そして数え五つを迎えた子供は里に帰るが、その中で才能を見出されたほんの数人だけが甚のお墨付きを得て「陣子」^{じんこ}となり、里で大切に育てられるのだ。澄たち三人も陣子であり、数え十の年の春、昼と夜とが同じ長さとなった日に甚の元にやって来て以来、修行を行なつて来た。

(焦っちゃいけない。落ち着け、落ち着け)

陣子の誇りをかき立て三は心で念じ、込み上げる恐怖と戦った。

パーン。漸く澄が放ち、その一弾は先頭ではなく群れの中程、周りの同類より一回り大きい人妖の頭を吹き飛ばした。それまでは一目散に澄たちを目指していた山守の動きが一瞬鈍る。斃れた仲間に二、三の人妖が寄り添うように留まり身を屈めた。しかし残りの山守は、その一瞬の後に再び勢いを取り戻し、坂を駆け上がり始める。「二十七」

進がそう呟くと三の足元に並ぶスキの「正」から一本取り去り、澄から銃を受け取り替わりに装填済みの銃を渡す。澄は振り返りもせずその神弓を受け取るや、流れるような動作で立ち撃ちの姿勢をとった。

一瞬、完全に自分が外されたことにも気付かず、三は二人の動きに見惚れていた。が、たちまち顔を赤らめ、進の肩を叩き自分の場所を取り戻す。進は左手の拳固で軽く三の胸を小突きにやりと笑った。強張りながらも笑顔を返し、三は自分が手にした装填済みの神弓を立て、澄に渡す瞬間を待つ。

ニタは、後どのくらいで自分が迫り来る人妖を防ぎ切れなくなるだろう、と思つた。先程爪に抉られた左肩はカシラが小袖を裂いて渡した布切れで縛り、血は止まつた。しかし痺れるような感覚は続き、左腕を上げることが出来ない。多分、この戦いが終わり平常心に戻れば激痛が走るのだろう。戦いが終わるまで生き残ることが出来たらの話だつたが。

山守の数は減つてはいたがまだまだ勢いは衰えず、新手を加えては寄せて来る。自分が傷付け退けた人妖の数を十幾つまで数えはしたが、既にそんな余裕は無くしていた。手にしているのは人妖の血でどす黒く変色した白木の柄に収まる小刀。彼自身の懐刀は七、八体目の人妖を払つた直後に刃が欠け落ち、得物としての役目を終えていた。いずれにしても最初の襲撃で既に血油に塗れた刀はいくら布で拭つても切れ味が落ちていた。役立たずの懐刀を投げ捨てたニタに、これを、とカシラが恐る恐る差し出した彼女自身の護り刀を譲り受け戦つていたので。

ニタの背後では役者が剣を手に山守に対していた。最前まで手にしていた槍は穂先が欠け落ち、それでも暫くは用心棒を使うかのように、刃のない槍を棒術の如く使いこなして山守を寄せ付けなかったが、一匹に噛み砕かれ折れてしまった。それでも役者は慌てず空かさず、熊皮の袋から一尺ほどの棒を出して握りに付いた掛け金をパチンと外す。すると白刃が飛び出し、棒は立派な剣に変わる。ニタは横目でそれを見つつ、次々に新たな得物を繰り出す役者に半ば呆れ半ば安堵し、背後を任せて来たのだつた。

役者は槍に劣らず剣の捌きも見事だつた。役者の剣は下士階級であるニタから見れば型や流派が窺えないものだつたが、小柄な身体 of 役者が振るえば不思議と目を惹くものがあった。その動きは全く無駄がなく、剣を無闇に振り回すことなどない。迫る人妖に切つ先を向け、彼らの得物である醜い爪と鋭い牙が役者の身体に及ぶ範囲内に入った時にだけ素早く僅かな動きで相手の急所を突き、刎ねる。槍を操つた時にそうだったように、やがては人妖も無闇に突き進む

ことを止め、隙を狙って爪を振るうようになった。こうなれば後は体力と胆力の勝負、わたしやの役者は無尽蔵の体力を持つているかのように、その表情も驚くほど穏やか、いっかな変わることがない。血を失ったことに加え緊張の連続で、既に体力の限界が見えて土としての意地だけに縋る自分と違い、なんとというしぶとさ、なんとという強さなのだろう。ニタはともすれば掠れる眼を見開くようにして、視線はじりじりと間合いを詰める山守に置いたままそう思った。そういえば、先の襲撃で見事に山守を打ち倒していた鉄砲使いの「助っ人」も、今は自分たちを護るのに必死なのだろうか、銃声は響くが周囲の人妖が倒れる気配はない。自分たちの命は自分たちの力だけで賄うしかなくなっている。時間の感覚は遠に失せ、どのくらい戦い続けているのか定かではなくなった。しかし、中天にあった半月は西に傾いて、時は確実に明けの刻に向かっている。このままの状態かんで山守を防げば彼らが苦手とする陽が昇る。その時まで一刻にじかん半か一刻か。それまで自分は、頼みの綱のわたしやは持つのだろうか？

「だ、大丈夫か、ヤブさん」

イチタの声は掠れ、張りが無い。

(遂に「さん」付けかい)

ヤブは内心苦笑する。無論笑える場面ではない。ずきずきと脈を打つように右手の甲が痛む。最初に寄せた数匹を打ち倒した後、爪に掠られた傷。山守の爪には軽い毒があるという。掠めたくらいでは死ぬほどではないが、きちんと手当てをしなければ傷に入った毒が悪さをする。時が経つに連れ凍えるような、痺れるような感覚が傷を中心に広がるのだった。しかし、そちらは問題としては大したことではない。問題はつい先ほど斃した一匹が冥途の置き土産にとヤブに与えた傷だった。

「晒を・・・」

ヤブの声も掠れていたが、こちらは疲れや恐怖のせいではなかつ

た。傷から入った毒で勝手に震えている右手。そのひとつの腕で支える小刀を、取り囲む人妖に振り向け威嚇し、ヤブはイチタに左の腕を差し出した。その二の腕、袖は引き千切られ、脚絆も裂けてむき出しとなった腕には惨い噛み跡が付いていた。血が湧き上がるように流れ腕を伝いポタリポタリと落ちていく。イチタは指示通りに晒を取り出して傷に宛がう。震える手は本人の意思とは無関係に手当ての次第を狂わせ、ままならない自分に悪態が零れるが、イチタはなんとか晒を巻き止血することが出来た。

「ああいい具合だ。小便ちびりそうな塩梅あんばいで、こいつは上出来だよ、イチタさん」

ヤブは囲む人妖に睨みを利かせつつ左腕を二、三回上下に振り、走る痛み顔に顔を歪めつつも戯言を言い、面伏せたイチタを元気付けようとした。

「すまない」

またもや頭を下げるだけ。何も出来ない。ただ護られるだけの存在。例えそれが金一匁という大金を差し出した対価にせよ、土の端くれである己の存在という価値観と現状の対比がイチタの小さくはない自尊心を揺さぶる。

（何をやっているのだ、私は）

わたしやに身を預けるまでの逃避行で既に刀は捨てていた。当初は頑なに拒んだが、目立つ上に山岳部の果てにあるという『きど』への道中の邪魔になるとニタにも諭され捨てて来たのだ。家を捨て、街を捨て、刀を捨て。すると逃げるのが全てとなつて己が命、掛け買いのない捨てられぬものとなる。土として死ぬことは恐れでなく尊厳を、家名を護るためなら捨てることも厭わなかったはずが、今や下層の民であるわたしや風情に命じられるまま逃げ惑う。何と言ふ恥辱、何と言ふ不甲斐のなさ。

（私だつて）

護身にと収めた懐刀。今までは触れはするものの取り出すことをしなかつたイチタは今、初めて抜き出し、鞘を払う。腕は震え続け

るが刀の切っ先をヤブと並んで人妖に向け、左手で笠の顎紐を解き、
払うように取り去る。

「ああいね、イチタさん」

ヤブは笑みを浮かべるが、

「でも、前に出るなよ。奴らに命をくれてやることはない」

「やるものか」

イチタは呟くがその声には張りが戻った。

「私とてかつては殿より知行を許された身なのだ。僅かな田地だっ
たが間違ひなく私の土地だった。やっと得た所領だったのだ」

「へえ、イチタさんはお偉いおさむらいだったんだね」

普段なら身の上を話し出す渡人を遮るヤブが、この時ばかりは止
めなかった。

「そんなに偉くはないが、私とて上士として湊の殿に出仕していた
こともあるのだ。それを妬んだ愚劣な一党に嵌められた私は切腹こ
そ免れたものの一切を失った。私と一族郎党は復讐を誓い、そして・
・・」

イチタは一旦身の上を始めると堰を切ったように止まらなかった。
大概の渡人がそうだった。ヤブは意識を山守から外すことなく、イ
チタの話も聞いていなかったが、イチタに話をさせるに任せた。

渡人は置かれた身の上に恨みと後悔を抱えている。それは自尊の
高い、たとえばこのイチタのような男には恥辱以外何物でもなく、
それを吐き出すことは逆に生きる力となる。だから身の上を話すこ
とで恐怖に負けるのを免れるのならば、そのままにさせておいた方
が良いに決まっているのだった。

それにしても、とヤブ思う。そろそろ来て貰わねばいよいよ観念
することになるが。そう思った瞬間、唸りを上げて一匹が飛び掛り、
それを合図に囲みが揺れ、二匹三匹と山守が襲い掛かった。

「ヒィー！」

「目を閉じるな！」

思わず屈むイチタを突き飛ばし、イチタに迫った山守の爪を即座

に切り落とす。続けて自分に爪を立てようとした反対側の山守に蹴りを入れ、返す刀で正面、三匹目の目を突き刺す。叫びと唸りと血飛沫と。渾然となった地獄絵図の中、ヤブの奮戦は続く。

拾壹・助人

「澄、あと十だ！」

三の甲高い声が上擦る。

「承知！」

澄は叫ぶように言う息を深く吸い込み、吐き出し、再び引き金を引く。もう十間も離れていない人妖がどつと斃れた。

「九！」

三の声は最早悲鳴だ。それでも彼は澄が差し出す銃を受け取り、換わりの銃を渡す。心の臓は早鐘どころの騒ぎでなく、脈を打ったまま喉から飛び出しそうだ。生唾をこくり飲み込むと進に空の銃を渡し、懐に手を入れ自らの短銃を取り出して装填しようとする。しかし、漆塗りの瓢箪から銃の筒先へ火薬を注ごうにも抑えることが出来ない震えで手元が狂い、内に入る火薬より零れ落ちる方が大きい。それでもなんとか火薬を詰め、予め口に含んでおいた鉛玉を和紙の小片に吐き出して包み、搾杖で銃口の奥へと突き固める。二連目の銃身に同じことを繰り返して、燧石式の撃鉄に異物が挟まっていないかを確認してから目を上げると、山守の姿が思いのほか大きくぎくりとする。先頭はもう五、六間先。その忙しない息遣いと嫌な臭いはすぐそこにあつた。

「澄・・・」

思わず出た呟きは催促ではなく祈りそのものだった。

「パーン。」

「八！」

「次！」

澄は涼しい顔を続けていたが内心は叫び続ける。

（もろかみよ、まもりかみよ・・・）

三と同じくそれも叫びと言うより正しく祈りだった。

進はその二人の後ろで弾を込める。目の前の油紙の上にきちんと

置かれたドングリ型の弾丸は六個。そのひとつを取り上げ、弾込めの棹、搾杖で銃膛に押し込む。無心に作業を続けていたつもりの中の手が何かに気を引かれ、ふと止まる。そして震える両手を目の前に翳す。

（おれは怖がつてなんかいない、こわくない、こわくない・・・）

広げた両手をぎゅっと握り締め、大きく深呼吸、再び見つめる手はまだ震えていたが、彼は弾押えの和紙を取ると弾を入れた銃膛に入れ、突き固めた。

カチン。

「チツ」

「な、七」

こんな時に不発。今の今まで不発はなく、それもそのはず、銃も弾も高度の技で正確に仕立てられた神弓の場合、ほとんどそういうことは起こらない。不発の場合、弾を抜かねばならないが、これは普段でも慎重を要する作業だ。外している途中で暴発することも多く、集中して掛からねばならないが、今、この瞬間に進や三にそれを求めても無理な話。もちろん進もそうするつもりはなく、筒先を安全な方向に向け、静かに置いた。

パーン。

「六！」

（兄貴・・・親方・・・）

思わず目を閉じた進の思いも祈りに他ならなかった。

暗い森の中から開けた野原へ二つの影が躍り出た。そこに甲高い銃声が響く。慣れた耳で距離を測り、影のひとつが立ち止る。耳を澄ませば再び銃声。間隔が短い。その影、笠の奥で独眼がきらり輝く男は、身体を屈め背負った長物の位置を直すと、再び脱兎の如く走り出す。

付き従うもうひとつの影は思わず見直すほどの巨体。様々な物を抱え背負って、只でさえ大きな体躯が倍以上に膨れて見える。驚く

ことに、そんな鈍重そうな身体に似合わぬ素早さで先を行つた男を
追い、走り出した。

やがて前方からざわめきと走り回る集団が立てる音。それに混じり、一度聞いたら誰もが忘れられないであろう刃物で肉を裂く音が聞こえ出す。二つの影が走る速度を緩めたその瞬間。

パーン。

先程来の銃声が大きく響く。それは遂に聞き慣れた者には火縄との違いが分かるほどになっていた。

「乃助ノスケ」

先頭の男が振り返り巨軀を呼ぶ。男が右手の小丘を指し示すと巨人は頷き、そのまま指示した男を追い抜いて小丘へひた走る。残つた男は笠を解き背にした長物を手にする。古い錦の袋から取り出したのは半月の明かりに鈍く光る銃。その銃を両手で支え、男は巨人を追つて再び走り出す。

パーン。

銃声と目標ひらいてが倒れるのが同時。相手は殆ど筒先から二間に迫つている。それでも澄は三から次の銃を受け取り、ゆるり構える。と同時に引き金を絞る。狙う必要などはない。山守は目の前にいて澄の方へ手を伸べたと同時に倒れる。その後ろに続く一匹は、こと切れてふらりしな垂れかかった仲間を無造作に脇へと放り投げ、その鋭く醜い爪が黒光る右手を振り上げた。

（ああ、ここまでか）

三が渡した次の銃を手に、構える間もないことを悟つた澄は動きを止める。不思議と穏やかな心持で迫る爪を凝視した。

（やるだけはやったんだ・・・サブ、にげろよ）

そこで三を見遣ると、彼は涙を浮かべながら短銃を自分に迫る一匹へ放つところ。

ターン。三は銃声と共にその人妖が二つに身体を折つて悶える様をぼかんと見ている。

「ばか、にげる！」

それは自分の声とも思われぬ皺枯れた声。途端、ガキツという嫌な音を立てて山守の爪が澄の持つ神弓に当たり、澄は離すまいと握り締めたことで前のめりとなり、顔面から大地へ強か叩き付けられた。その衝撃で吸い込み掛けた息を吐き出し、痛みで次の息が出来ずに足掻く。目の前が暗くなり、すると何かがシュルシュルと音を立て……

ドカーン。

暗くなつた澄の視界が途端に赤く燃え上がる。

「澄！」

進の声と同時に再び、シュルシュル……ドカーン。

うつ伏せの姿勢から顔を上げた澄の視界が再び赤く染まり、そこに黒い影が幾つもの吹き飛ぶ様が目に焼き付いた。

「兄貴！」

澄ははっと身を起こし掛けるがすぐさま隣に伏せた進に頭を押さえられ、

「ばか、伏せている！」

押さえられたまま、ふと横を向くと身を伏せた三と視線が合う。

「無事か、三」

「うん。澄は？」

「なんともないよ」

シュルシュル……ドカーン。

「起きろ、ずらかるぜ！」

澄を庇っていた進が素早く立ち上がり、澄に手を差し出す。大筒の三連射、その後ゆっくり十数えるまでの間合い。援護する者とされる者、火縄衆暗黙の仕来りだった。瞬時に状況を理解した澄は進の手を便よすがに立ち上がり、山守の爪を受けて彼女の身代わりに銃把が削ぎ落とされ銃身に生々しい爪痕を残す神弓を調べた。進は立ち上がる三の肩を叩いて励ますと、

「荷物は置いておけ、今は」

澄は大切な銃をそつと地面に置くように進んでいく。

「行くぞ！」

再び聞こえるヒュルヒュルという砲弾の風切音。三人の少年少女は斃れた山守、吹き飛ばされたままのた打ち回る幾多の人妖、そして新たな爆発で吹き飛ばす人妖の間を一目散に駆け下った。

パーン。

目の前の山守が頭を撃ち抜かれ、吹き飛ばす。その人妖は正にこちらの喉笛を食い千切らんと牙を剥き出し、血糊に滑って尻餅をついたニタに押し掛かっていたのだ。重みが去ると、深い溜息が自然と漏れる。しかし、息を吐く間はなく、新たな山守がこちらに爪を振るおつと迫った。すると横合いから白刃が伸び、くるり回転するとその切っ先が人妖の腕を掠める。ニタは、その腕がすとんと落ち、腕をなくした山守が悲鳴を上げて転がりのたうつ様を呆然と見送るだけだった。

「助人が来た」

人妖の腕を落とし、ニタを引き摺るようにして傍に寄せた役者。その言葉を裏付けるかのような銃声。それは次第に間隔が狭まり、斃れる人妖の数はうなぎ上りに増え出す。すると近くで何かが破裂する音が。空を掠めるシュルシュルと言う音に続く炸裂音。それと共に左手に上がる真っ赤な光と鼻を突く硝煙の臭いが漂って来た。

「ニタさん、少し下がるよ。カシラ！」

最後はカシラに声を掛けるとカシラは震えながらも顔を上げ、頷く。ニタは痺れる左肩を一度ぐつと握るようになると懐刀を鞘に納めて立ち上がり、カシラの脇で身体を丸めるようにしていたヒメを抱え起こす。

「大丈夫か」

こくりと頷くヒメの顔は蒼白だったが、まだ目は死んでいない。励ますように肩に手をやるとニタはその右手を握って立ち上がらせる。山守は次々に斃される仲間に取り残されたのか彼らに向かうも

のはなくなり、一様に身を屈め、猿のように両手をだらりと下げて辺りを走り回っている。

「こつちだ！」

手招く役者の後、三人の疲れ果て生気の失せた渡人は、それでもどうやら小走りと呼べる速度で人妖の群れの中を突っ切って行く。

ピユウーイ。

山守が立てる興奮した鳴声と枯草を踏み^{しだ}拉く音や、神弓の甲高い発射音と大筒の腹に響く発射音が交差する中、よく通る指笛の合図が響き渡る。

それを聞いた乃助は今、正に装填しようとした大筒を静かに置き、その場に並べていた火薬の小樽や握り飯大の爆裂弾の入った木箱を、まるで飯事の道具を片付けるかのように軽々と集める。あつという間に道具を背負子に纏め背負うと、その巨体に似合わぬ素早さで指笛のした方向へ駆け下りて行く。

同じく指笛を聞きつけた重吉^{シユウキチ}が、狙撃を行っていた萱の茂みから神弓片手に走り出すと、いつの間^{ホウタ}にやって来たのか、放太が併走した。

「^{ムレスシ}群主は落とした？」

場違いなほど明るい声で問う放太に重吉は首を横に振り、

「いや。だが組主^{クミノシ}は七体全部斃した」

「そう。じゃあ動きは止めた訳だ」

放太はそこで不敵に笑む。

「残りは貰っていいかい？ 兄貴」

しかし重吉はにこりとせせず、

「戯言を言っているの今内だぞ。月を見る」

走りながら放太は空を見上げる。半月はほぼ中天に達していて、

雲は多いものの所々には明るい星が瞬いている。その半月は湿度の高い空気を通して朧に見え、その周囲には円形の虹が何重にも見える。

「・・・月虹は天の扉が開いた徴、つてか。ありがたくねえなあ」
呟く放太の笑みも消えた。

山守の群れの中、無我夢中で突っ切って丘を駆け下りた三人は、四町ほども走って漸く足を緩める。普段なら起伏の大きな陣の森を駆け抜けても息を切らすことなどない三人も、この時ばかりは激しく肩を上げ下げして貪るような息をしていた。すると彼らの前にぬっと大きな身体が立ち塞がる。ぎよっとして立ち止った進がすぐに緊張を解いて、

「ああ、乃助の兄貴・・・」
するとその巨体の後ろから二人の男が現れる。

「重吉兄、放太兄・・・」
澄が一步進み出ると、すたすたと歩み寄った重吉は音高く彼女の頬を張り、続けざま、進と三の頭に拳固をくれる。

「ごめんなさい・・・兄貴」
叩かれた頬に手をやり、頭を垂れて声を上げずに泣く澄の後ろ、進も三もしよげ返っている。

「神弓は」
「置いてきた」
進が下を向いたまま答える。

「それでいい」
ぼんと進の肩を叩くと、
「これが終わってから拾いに行く。さあ、考えるのは後だ」

「重吉の言う通りだ」
声の方を三人が見遣ると甚が二人の供を連れてやって来た。

「今夜はまだ終わっちゃいない。始めたからには最後まで。いいか、きつちり始末をつけるぞ、澄」

「はい」

甚は頷くと供の方を振り返り、
「ご苦労だったな、ここでいい。降ろしてくれ」

背負子に火薬樽と火龍油樽を乗せていた男が荷物を降ろし、樽の上、括り付けていた油紙に包まれた細長い棒状の物を慎重に外す。恭しく差し出した油紙を隣の女が受け取る。

「帰っていいぞ。まもなくここは戦場だ」

「助太刀しますぜ」

「いいつてことよ、ヨシゾウ。こいつはおれたち陣守の仕事だ。それより里に帰ったら長老に、之森サンを鎮めるために奉ってくれと伝えてくれないか？朝になったら神サンのご機嫌を伺いつつ総出道を直しに掛からねばならない、とな」

「承知」

荷を運んだ男は一礼すると音も立てずに萱の原に消えた。見送った甚は手下を振り返り、野太い声を張る。

「さあ、まずは山守を鎮めるぞ」

「オイラに任せてくれねえか、頭。今夜はまだなんも働いてねえからな」

前に出た放太に甚は、

「許す。だが派手にやるなよ、まだ続きがある」

「承知」

満足げに頷くと放太は、

「怜」

「あいよ」

「後見を頼む。それから澄、進、三」

「はい」

放太は一樣に神妙な顔を上げる三人に歩み寄ると、それぞれの額を順番に人差し指で小突き、にんまりと笑った。

「小童ども、ついて来な。お前らにも一働きしてもらうからな」

ヤブは身振りで付いてくるようにイチタへ合図すると、山守に蹴散らされた萱の原をゆっくりと進む。イチタは未だ止まらぬ震えと心の臓の鼓動に息を乱しながらもヤブの後ろに続いた。

つい先程まで群成して押し寄せた山守は、まるでヤブたちが見えていないかのようだ。組主クミノシと呼ばれる四、五体から十体ほどを束ねる長おさを失った山守たちは、目的も忘れ無闇におろおると走り回るもの、蹲り全く動かないもの、二、三体寄り添い固まって何かを待っている様子を見せるものと様々で、行動に一体感がない。

斃れた組主と思われる一体を、まるで弔いのように囲み蹲る四、五体の山守。その脇、息を殺してすり抜けた後、緊張の余り足取りが覚束なくなり萱の根に足を取られて倒れ掛けたイチタは、支えたヤブにすまないと言くと、

「どうしたんだ、こいつらは」

イチタの声は囁きだったがヤブは口に一本指を立て、喋るなど注意する。放心しているとはいえ、山守たちはいつ何時こちらに興味を持つかも知れない。こんな時にも話し掛けてくるイチタの無粋に少し苛立つヤブだった。

人妖の性質や朱ヶ原の状況にも慣れたはずのヤブでさえ神経を磨り減らす道行き。

ほんの僅かの間でさえ半時は経ったかのように思えたその時、妙に明るくなりつつある萱の原、その中をこちらと平行して進む一団が見えた。まだそこかしこに点在する山守をゆっくり避けるようにして、その一団はヤブたちの進路と交差するように近付いて来る。先頭に立つのは熊皮と火龍を背負った小柄な人物。その後固まって三人が続いている。

ヤブが立ち止ると先方も立ち止った。ヤブは萱が途切れて下草の低い右手の草原を示し、相手が頷くのを確認するとその空き地へ乗り込んで行く。

「無事だったか」

「そつちもな」

ヤブと役者は低く抑えた声でお互いを労う。渡人たちは生死の境を綱渡った緊張がふと緩み、その場に蹲る。気を失う寸前のヒメを助け起すニタ。その顔も血の気が失せ唇が紫色。突然蹲っていたイチタが吐瀉し、カシラは放心に近い状態でその背を摩る。

ヤブは瞳の合図で役者を呼び、役者は辺りを慎重に窺いつつその傍らに立つ。

「火縄衆と合同する」

「それがいいね」

「ジンの事だ、ここにいれば時機にやって来るだろうよ」

承知の意味で頷くと役者は空を見上げる。

「来るよね」

「ああ、来る」

その横顔を見遣るヤブは役者の顔に懐かしいものを見た。真一文字に堅く結んでいた口の端を緩めると、優しくその左頬を二度叩いた。

「顔色に出ているぞ」

「済まない」

役者は強いて笑顔を浮べた。

「『吟味』に耐えられそうにないか？」

ヤブの顔が優しい。役者は自然と歳を遡り、十年前のヤブの顔を重ねて行く。

「正直、怖いよ、ヤブ」

「大丈夫だ。お前は立派にやっているよ」

役者の頬をもう一度撫でると、

「奴らは弱い魂から喰い潰す。お前は大丈夫だ」

「でも、護り切れない」

視線が渡人の方へ泳ぐのを寸前に堪えた役者は、

「渡人を連れて奴らに会うのは初めてなんだ」

ヤブは大らかに肩を竦めて見せた。

「お前のせいではない。教えただろう？ 奴らは弱い魂の匂いに惹かれてやって来る。強い心持には仕方の無い時にだけ対する。心持など人の有様だ。俺たちがどうもこうも出来ないだろう？」

「それは分かっているけれど」

なおも悩む様子の役者にヤブは強く言い切る。

「俺たちはここまで護り切った。後は己が命、それぞれが賄う番だ」
その時。

ピューイツ。

指笛が響く。

二人が音の方に視線をやれば、大小四つの人影が萱の中から踊り出た。音も立てずに見事に二人の下へ。驚く渡人たちは思わず立ち上がった。

わたしや二人の前にあつという間に四人が並ぶ。その中で一番背の高い中肉中背の男がずいっとヤブの前へ。編み笠をぐいっと上げた男。月明かりにその顔が覗く。笑顔の男は街中での挨拶のように気楽に声を掛けた。

「よお。生き残ったか」

「久しいな、放太^{ホウタ}」

「あんたらは余り俺たちを使わないからな。毎回使ってくれるお得意も多いってえのによ。たまには使えよ」

ヤブはふっと笑むと、

「腕がいいからな」

「まあ、その腕のいいわたしやの旦那が、随分とまあ派手に渡って行くもんで、こっちも少し本気で掛からねばならなくなってるよ」

「ジンが来ているのか」

「陣守全員だ」

「それは頼もしい」

放太は首を傾げて、

「なあに、こつちも商売だし、それに」

月を見上げ、呟くように、

「天からお使いが降りてくるんじゃあ、仕方がなかるう」

ほんの一瞬だったが、放太の顔に陰が浮ぶ。それをやれやれと振り払うと、

「この後は、ちいっとばかりきついな。その前に雑魚どもを払う。ここで固まっているよ」

鋭い目で頷くヤブに、放太は欠けた前歯を覗かせて笑う。

「御代は何時もの三倍増しだぜ」

月が異常なほど明るく輝く中、迸る炎と銃声、大筒の音が競うように響く。逃げ惑う人妖は成す術もなく次々に斃れて行った。

放太は帯に火龍油のたつぷり入った竹筒を数本突き刺し、火龍を放つ。炎の舌は湿った萱を炙り燃え立たせる。火龍を諸に浴びた数体が、焼ける己が身体をのたうちながら醜い奇声を上げる。放太は前進しながら次第に炎の壁を狭めて行き、人妖を牽制し退路を塞いで行った。

先ほどのように見晴らしのよい小丘に登った小童三人衆。炎に追われて次第に寄り固まる山守を澄と三が神弓で狙い撃つ。二人の動作はカラクリのようで、一方が構え狙い撃つ間に、片方は銃腔を清掃し新たに弾を込め、撃つた者が片膝を付くや立ち上がり人妖を狙う。銃声は十数える毎正確に鳴り響き、殆ど仕損じることなく人妖の数が減って行く。

二人からやや離れた場所では進が大筒を揮う。彼が両手に大筒を捧げ持ち、両足を踏ん張り下手に突き出して放つと、榴散弾が群の中で破裂し、あつという間に数体纏めて始末する。進は柵引く砲煙の中、水を張った小桶から突き棒に絡めた雑巾を取り、砲腔を拭い、小樽から和紙に包まれた装薬を取り出し、砲口から奥へ突き入れる。

そして足元に置いた背負子の籠から砲丸を取り出す。予め三十を数える長さで燃え尽きるよう導火線を切り取った砲丸は、濡れた和紙に包まれ点火されると慎重に砲口から収められる。そのまま砲身を擡げ、ぐつと地面を踏み締めると、人妖が固まる場所を見据え、抱えた砲身の右後ろの握りにある火打石式の引き金を絞った。これは五十を数える間に一回、ほぼ正確に繰り返された。

群を八つ裂かれた山守たちは蜘蛛の子を散らすように散り散りとなり、元の棲家、萱の原に穿たれた多数の竪穴へ飛び込み、闇の奥深くへと消えて行く。

火縄衆の火力は田舎領主の遙か上、都を窺う有力大名誇る鉄砲隊に匹敵する。百体余りの人妖が蹴散らされるまで僅かの時も要さなかった。

「終わったか」

ヤブが辺りを見回しながら呟く。

それまでの派手な爆発音や銃声が途絶え、人妖の上げる奇声やざわめきがぱたりと止むと、青白く照らされた萱の原は不気味に静まり返る。

と、萱を分け行く音がして、わたしやの二人が身構える中、一団の人々が広場に姿を現せた。その中央の人物を認めるとヤブの構えが自然と緩む。

「苦勞を掛けて済まない、甚^ジ」

大股で近づく男に声を掛けた。

「全く、とんでもないことだ。天が怒つちまつたぞ」

三步の距離で立ち止った男、甚は腕を組んで口をへの字に曲げた。ヤブはぺこりと頭を垂れると、

「之森の神サンには申し訳ないことをした。後で必ず奉げ物をするから取り成してくれ」

甚はやれやれと首を振り、

「お前は変わらずだな、ヤブよ。命の心配はないのか？」

「そんなものつくにねえよ。今こうしていることが天の配剤つてやつだ」

甚はもう一度首を振る。

「ではその天がお前の運を食い潰さないかどうか、見守らないとな」とすると騒々しく萱の原を分け下る者がいる。

「終わった、終わった」

火龍を肩に放太がぶらりと近寄る。澄、進、三の三人はその後ろ、自らの得物を捧げ持って大人しく従っている。

「ご苦労だった」

甚が労うと、その横からヤブが、

「澄、助かったぞ。進と三もありがとうな」

少し照れ気味に面伏せる三人だった。

「ヤブ、この人たちが？」

イチタが胡散臭そうに甚たちを見遣りながら近付く。

「助っ人だ。他言無用ですぜ？イチタの旦那」

「無用も何も私たちはこれから」

誰の前でも「きど」の事を言つてはならない、言えば渡人全員を始末する。ヤブから最初に掟を言い渡されたのを思い出し、寸でのところで言葉を飲み込むイチタだった。

「そうそう。それでいい」

ヤブは苦笑を押し殺し、ぶつきら棒に言う。一斉に頭を下げるカシラたち渡人に、甚は鷹揚に頷いた。

「皆の衆。我等は陰の者だ。こうして面突合すのも本来ご法度とされてる。これから我等が為すことを一切口外せず無視しておいて頂きたいが、良いかな？」

「わかりました。よろしくお願いいたします」

カシラがもう一度頭を下げると甚は、

「礼には及ばない。これも商売だ」

凄みと威厳を漂わす甚とその背後の火縄衆を見遣り、安心して顔を見合わせる渡人たち。しかし火縄衆やわたしやの顔付きは厳しい

ままだった。

「役者の。どうした、元気が無いな」

今まで黙って甚の後ろに控えていた重吉が役者に歩み寄る。

「ああ、重吉さん、いつぞやは」

役者は肩を竦めて、

「いや、ね、みなさんがさっさと方を付けるから手持ち無沙汰でね」

その声はいつもの調子だった。

「そうだな。この後の始末も俺たちに任せろのだから、お前の取り分も少しこちらに頂きたいものだな」

重吉は強いて明るく言うが独眼は鋭いまま。役者がこちらを見据えて微かに頷くのを見て、こちらも顎を引く。

「それはこの後の顛末で考えさせて貰うよ」

半月にしては妙な具合の月光だった。それは暗闇に穿たれた光の洞穴。あれだけの雨風を呼び込んだ荒雲は去り、所々千切れた筋雲が見える。が、これだけの月光、ほの白く浮かび上がるうはずが黒一色の濃淡でしかない。人妖の消えた萱の原も次第に視界が狭まって、天の月はまるで人の集うこの空き地にだけ光を投げ掛けているようにも思える。それは雨戸の節穴から差し込む光の帯、周囲の闇を際立たせた。

言葉も途切れたわたしやと火縄衆の尋常ではない様子に気付いたニタは、その闇を見渡し、何かが迫っていないかを探ろうとする。

「おい、今のうちに先へ進まなくていいのか？」

不安の伝染したイチタが傍らのヤブに問うが、

「シィ！」

口の前に立てた指が拒絶する。イチタが尚も言い募ろうとした瞬間。

「奏天だ……来やがった」

呟いた放太の顔は何時になく厳しい。その隣で腕組みをして空を見上げる重吉も夜空の節穴を睨んでいる。

「一体何が……」

言い掛けたイチタにもその音が聞こえ出し、その聞き慣れない音に辺りをきよるきよると探る。

初めは微かに、吹き渡る風の音に似た甲高いヒューという音。それが何かゆつたりした楽曲、例えるのなら雅楽の笙や孤笛の調のよくな眠気を誘う旋律に聞こえて来る。

疲れ果てた身体に鞭打つように立ち上がるカシラ。その傍らでは気力の失せたヒメを支えながら空を見上げるニタ。一同、次第に明らかとなるその光景に息を呑む。

「鳥？」

カシラの声は恐怖に震えていた。

それらは天に穿った穴のような半月から入って来るかのようにだった。

月明かりの夜空に羽を広げた影、それは月を背景に白く輝いていたが、月の光を受けたというより自らが光を放つように見えた。人のかたちと鶴に似た白く大きな翼。全身白い羽毛に覆われて髪の毛だけは金色、その顔は影になってよく分からない。先頭の一羽がゆつくりと旋回を始めると、続く十羽がそれに習う。

「来た来た、来やがった」

一体何時取り出したのか、放太の得物ぶきが増えている。先程来手にして来た火龍を背負子で背にした放太が手にするものは、銛を束ねたかのような形だった。その穂先を地面に向け、ぐつと空を見上げて仁王立つ。

「翔落を」

甚が落ち着いて後ろに声を掛けると、控えていた大柄の女、怜は背負っていた錦の長物を降ろす。異国由来なのだろう、黄金の龍と紅い鳳が競う、極彩に輝く絹で織られた袋から怜が取り出したのは、一見単なる小銃。彼女は錦の袋を丁寧ていねいに畳むと、その銃をざつと一巡、素早い動作で仕掛を調べると腰の小袋から和紙で筒状に固めた

装薬を取り出し銃口から落し入れ、続けて銀色の弾を入れ、搾杖で突き固めた。引き金の上の打ち金にしっかりと金輪が嵌っているのを確かめると、甚に差し出した。甚は受け取ると打ち金の金輪を外し、銃床を右肩に当て、空を狙う。そのまま微動だにしなくなった。

「あれはなんだ」

イチタの問いも虚しく、誰もが空を見上げ動かない。

「おい、ヤブ！教えてくれ、あれはなんだ！」

暫くはヤブも腕を組んで空を見上げていたが、やがて、

「あいつらは獣でも人でもない。山守のような人妖とも違う」

空を睨んだままヤブが呟く。

「おれたちはあれのことを天守と呼ぶ」
ソラモリ

「ソラモリ？」

次第に降りてくる輝く姿にイチタは口を開いたまま固まった。

拾参・夫守（ソラモリ）

それは白い羽と羽毛の身体が息を飲むほど美しい鳥人。天女は羽衣で空を舞うというが、天守は自らの翼で優雅に飛んでいた。殆ど羽ばたくことがなく、鷹や鳶のように滑空し円を描く。月明かりに縁取られるそれは、銀箔を纏うかのように光っている。

半月は益々輝き、最早それは月には見えない。まるで天道の欠片のようだ、とニタは思った。その光の塊を周回する美しく白い鳥人たち。すると、今まで月の欠片から生まれ出た様にして、てんではらばらに舞っていたそれは、次第に一羽の先導に従って列を成す。群れはゆったりと螺旋を描きながら降りて来る。翼の羽が靡いて、ひゅう、と風を切る音まで間近に迫った。

「おい、あ、あれは危ないのか？」

イチタは震える声を必死に抑えながら問う。しかしヤブはそれには答えず、

「いいか、月を見つめて心を保つんだ。神サンに祈ってもいい。やつらが来ても目を合わすな。やつらは人の魂を喰らう鬼だ」

「お、おに？」

ぎょつとしたイチタにヤブは重ねて、

「やつらが何をして心も動かすな。例えば目の前に死んだ筈の知り合いが現れても無視をしる。そいつはやつらが見せる幻だ」

ヤブは空の一点を見つめたまま微動だにしない。

「幻に現を抜かせば、魂を喰われるぞ」

空を舞う「鬼」は、朱々原に棲む人妖を「山守」と呼ぶのに対して「天守」と呼ばれる。古来より人を襲う魔物の中で、もつとも厄介な相手とされる天守。その得物は空を舞うことでも牙でも爪でもない。

天守は人の魂を喰らうという。強い魂を持つ者は相手にしないが、弱い心を見つけるやその者を惑わし魂を奪い去ると伝えられる。故に人は天守と対する時、その資質を問われるに等しい。

真白な飛鬼は初夏に舞う燕の如く、地表すれすれに滑る様に飛んでは浮かび上がり、舞っては浮かぶ、を繰り返している。見守るヤブたちとの距離を少しずつ詰めているのも分かった。

「わたしやの！」

火縄衆の放太ホウタがヤブに一声。振り返るヤブの前、柄を前に細身の刀を鞘ごと差し出した。

「あんたの刃毀れた小刀じゃあ奴らは切れねえだろ。そいつには暫鬼の呪いがしてある、使え！」

「すまん！」

ヤブは鞘を握るやさつと抜き放ち、持ち替えると下段に構えた。その横、焦るイチタが重ねて問う。

「待っているだけでいいのか？こちらから退治しなくて良いのか？」
しかしヤブや火縄衆も空を見上げたまま集中し、イチタは完全に無視された。

「なあ、ヤブ！」

不安と焦燥からイチタはヤブの袖を引く。ヤブが見上げた顔をすいっとイチタに向ける。すると

「お、おぬし！」

イチタはぎよつとして飛び退った。

「お主がどうしてここに！」

イチタを見つめる顔はヤブではなかった。忘れもしない憎き男。その憤怒の形相に思わずイチタは懐刀に手を伸ばす。しかし頓着なく『ヤブ』が一步、イチタに向かつて踏み出すと彼は思わず二歩後退る。そんな自身の不甲斐なさに胸打たれたイチタは、

「お、おのれ！」

自らを奮い立たせるようにして抜いた懐刀を前に翳し、ヤブに對する。

「何故ここに！」

しかし『ヤブ』は鬼の形相でなおも迫る。

「貴様！」

懐刀を両手に握り締め、イチタは威嚇するが相手は全く止まる気配がない。そして。

おまえ

憎き敵の姿に変わった『ヤブ』が初めて喋った。

「な、何だ！」

震えるイチタの前、『ヤブ』はすうつと右手を上げ天を指す。

くるか

「は？」

そらへくるか

すると『ヤブ』が再び変化へんげした。敵の姿は砂楼が波に浚われるが如く崩れ、再び立ち上がるとそれは見目麗しき娘の姿に。

「ひ、姫様！」

狩野。わらわと共にそらへ参るかえ？

それはイチタが十年前、まだ若き勘定役山川方として湊の城に出仕していた頃、美貌と才気で評判だった藩主の二の姫。時には所領の御狩場へ案内をしたものだった。

苦勞を掛けて済まぬの、狩野よ。そちの嫌疑は一切晴れた故、もう気にするでない

猜疑心の強いはずが、懐かしいその姿に一瞬でその場を忘れるイチタだった。

「姫様、それは誠にございますか？」

すると『二の姫』はこころごとく笑い、

狩野よ。わらわがそのような嘘を吐いてどうするぞ。また、昔の様に供をしてくれぬのかえ？

イチタの目に涙が浮かぶ。慌てて目を擦り笑顔を浮かべ、

「姫様、是非に」

イチタはうれしかった。その気弱さと愚直さで代々築いて来た役目を追い落とされ、拳句は身に覚えのない横領の濡れ衣を着させられた恨み辛み。それがあつという間に晴れて行く。

日差しは眩しい位に輝き、姫は昔隠れて仰ぎ見たそのままに大層美しく、ふわりとした風が頬をくすぐり、疲れはいつの間にか失せていた。軽やかに笑う姫の後、イチタはこれ以上もなく幸福だった。そして

カシラが勇気を奮い起して見上げた夜空。イチタが天守二羽から両脇を取られ、月を指して昇って行く姿が確かに見えた。その姿は驚掴みにされた兎に似て、だらりと頭、手足を垂れている。

「兄上！」

カシラは思わず叫んでそちらへ走る。すると目の前、一羽の天守がふわり降り立ち遮る。ぎくりと足を止めたカシラだった。

天守は金色の髪、左右の目が金色と銀色と違って見える。その白い顔は端正な青年の顔に見えた。体を覆う羽毛はふわふわと波を打ち、内側から見つめることが困難なほど光り輝いている。その冷たい眼差しは無遠慮にこちらを貫く。やがて声が

そなたもくるか

「え？」

そなたもくるか

天守の口は開いていない。その唇は極端に薄く、一本の線となっているだけ。しかし、その鈴の音のような軽やかな声はしっかりとカシラの耳に届いていた。

そなたもくるか

天守は固まって動けなくなったカシラにすうつと寄る。

そらへくるか

「私は……」

そらへくるか

「……そら？」

すると周りの風景が一瞬で溶けた。寒々とした萱の原は一瞬で菜の花が一面に咲き誇る小丘となった。空は蒼天、ほんわりと浮かぶ雲が眩しい。

呆然と佇むカシラが自らの格好に気付くと、泥に汚れた薄汚い旅衣から家屋敷にいる時の装いに変わっている。

（これは、夢？）

空気は正に春めいて穏やかな日差しはぼかぼかと背中を暖める。

緊張と疲れから凝り固まった全身が瞬時に解れ、緩やかに溶けていくような脱力感。何かがおかしい、と感じても、拭う事の出来ない現実感。

ミワー？美和^{ミヨ}！

実の名を呼ばれ、振り返ると懐かしい顔があった。

「母上！」

おやまあ、そんなところで何をしているの

数年前に亡くなった母の姿だった。それも床に伏せ、やつれ果てた母ではなく、カシラが子供の時分の若く優しい姿。問われたカシラは混乱し、自らを省みる。

「私は……」

何をしているのだろうか？兄に掛けられた嫌疑が身に降り掛かり、身を隠し、追われ、更に先へ逃げることを選び、そして山へ。ひたすらに生にしがみ付いた。恥を忍び、兄妹一同、いつか巖に嵌めた憎き田之上平左に復讐し御家を再興すると誓い……ここは一体、どこ？

「ここは、どこでしょう？」

おやおや、寝惚けてお出でかい？ここを忘れるなんて

そうだ。私はここを知っている。懐かしく温かく優しく安らかな……でも思い出せない。ここはどこなのだろう？

さあ、美和、行きましよう

母が手を差し伸べる。優しく温かいその手を良く覚えている。
「母上。何処へ出掛けるのでしょうか？」

何処へって、おやまあ、まだ夢の中にお出でのようだねえ
それは記憶に刻まれた母の優しい笑顔と仕草そのまま。

「母上？」

しかし、母は手を差し伸べただけでそれ以上何も答えない。カシラは我知らず一歩、母の手に招かれ踏み出す。母の笑みが増す。更に一歩。

「母上」

カシラにはもう母の笑顔しか見えない。それが幻であり消え去ることを無意識に恐れ、彼女の世界が閉じて行く。

そのとき。

グエツッ！

『母』が突然形相を変え胸に手をやる。カシラは驚いて自然一歩引くと、『母』の胸から何かがぬっと飛び出した。カシラが見つめるその前で、『母』の姿が変化^{へんげ}する。

懐かしく優しい母の顔は苦しみ悶え、歪むや否や似ても似つかぬ蒼白な顔色の美男となる。白目を剥いたそれから思わず二歩三步引いたカシラの前、びくびくつと波打つ様に痙攣する。その胸から飛び出した白刃がさつと引き抜かれると白い羽根を散らしながら崩れ落ち、その向こうに刀を構えた男の姿が現われた。カシラは悲鳴を上げ、弱々しく身を庇うかの様に両手を上げたが、直ぐにそれが誰かを認め、力を抜く。

ニタだった。その顔に紅い返り血を浴び、目だけが異様に輝いている。カシラは一瞬で我に返った。

「勘蔵^{カンゾウ}！」

「姉上……」

ニタは名前を呼ばれ、構えた刀をだらりと下げ、そこで我に返ったのか懸命に右手から離れない刀を振り解き、そしてカシラ 長

姉の腕に縋った。

「夢です。夢なのです……あ、あやつら妖人は夢を見せるのです」
ニタは流れる涙を拭いもしない。それは御狩場を預かる役目を果たしていた立派な若侍の頃には信じられない姿だった。

「その者が揺らぐ、美しい夢を見せ、そして魂を奪うのです……それでも……私は」

嗚咽がカシラの胸を打つ。自然、自身も涙が零れるカシラだった。
「夢とは言え、母上を殺してしまいました」

「同じ……同じ夢を見ていたのですね」

カシラの声は優しく、既に普段の声音に戻っていた。

「ありがとう、勘蔵。助かりました」

「でも、でも母上を……」

なおも言い募る弟を優しく抱きとめ、姉ははつきりと言った。

「甘い夢はもう終わりました。すっかりおし、勘蔵」

それはイチタを諭すと共に、カシラ自らの、捨て切れずにいたこの世界との決別でもあった。

「後ろを見てはならないのです」

「兄上も……」

ニタは涙にくれたまま、空に連れ去られたイチタを目で追う。もう、その姿を認めることは出来ない。十数羽の天守が舞っているだけだ。

「兄上のごとも」

ぐつと堪えながらカシラはその先を言う。その頬にも涙が止め処もなく流れていた。

「忘れなくてはならないのです」

血溜りに伏せた天守の前に、姉弟は膝を付く。お互いの存在を、幻ではない事を確認するかの様に抱き合った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2735j/>

われはわたしや

2011年11月27日10時52分発行